

我に御らんとあはせて  
人々あまたの中に。我に貴人の御目を見合  
せてのたりきかせ給ふ

うちきいなどに 同音の事よし微書記の  
説にあり  
みづからうへには 清少の身には歌ほめ  
られし事はなけれど。舞しからんさおしは  
からるいそ

かのいひたりし人ぞをかしき  
此書を見てこそいはれけりと思ふに心にて  
おもしろき

いとうれし。よき人の御前に人々あまたさふらふ折に。昔  
ありける事にもあれ。今きこしめし。世にいひけることに  
もあれ。かたらせ給ふを。我に御覽じあはせてのたまはせ。  
いひきかせ給へるいとうれし。とほき所はさら也。おなじ  
都のうちながら。身にやんとぞなく思ふ人のなやむをき  
て。いかにくとおほつかなく歎くに。おこたりたるせ  
うそこえたるもうれし。思ふ人の人にもほめられ。やんと  
となき人などの口をしからぬ物におほしの給ふ物のを  
り。もしは人といひかはしたる哥の聞えてはめられ。うち  
きいなどにほめらる。みづからのうへにはまだしらぬ  
事なれど。なほおもひやらる。いたううちとけたらぬ  
人のいひたる古き事のしらぬを。聞出たるもうれし。後に  
物のなかなどにて見つけたるはさかしう。たう是にこそ  
ありけれ。とかのいひたりし人ぞをかしき。みちの國がみ。

哥の上旬下旬。源氏早殿番に。はかなき  
ことなも末をこりていひかはしとあり  
とみに物もさむる見出  
イニひ出たる。急に物を尋るに其有所を  
知たる人のいひきかせし  
物合せ何くれ  
吾合論合何ややさいむむ。暇イドム  
あらそふ心  
「訂」此所の詞「物あはせ何くれさいむむ」に  
かちたるいひでうれしかららん。とあり  
るを。異本には「物のをりに衣うたはせて  
いかならんと思ふにきよらにてえたる」と  
あり  
いみしう我はと思ひて  
我は人にたばかられど賢がほなる人をた  
ばかり得たるがうれしき也。たはふれの  
たばかり事  
「訂」こも。又いみしうより。男はまさりて  
うれしとあるまでの数字を異本には左の  
如くあり  
「又もおほかる物のけか。日比月比しるきこ  
とありてなやみわたるが。おこりにゆるも  
れし」  
女ごちより。女同志の中に其友の女を  
たばかりしより。男をたばかりしはうれ  
しき也  
是がたうは必せんすらん  
其たばかる折に。かたはらの人々のたばか  
らる。人のかごごせんと思ひしに。かた  
うごせざりし心なるべし。たは眞の字也。  
字誤云。藤。則也。又相助。非爲。藤云々

白きまきし。たゞのも。しろうきよきはえたるもうれし。  
はづかしき人の哥のものとすとひたるに。ふとおほえた  
る。われながらうれし。つねにはおほゆる事も。又人のこ  
ふにはきよく忘れてやみぬる折ぞおほかる。とみにもの  
もとむるに見出たる。只今見るべき文などをとめうし  
なひて。萬の物をかへす。見たるに。さがし出たるいと  
うれし。物あはせ。何くれといごむ事にかちたる。いかで  
かうれしからさらん。又いみしう我はと思ひてしたりが  
はなる人はかりえたる。女ごちよりも男はせごりてうれ  
し。是がたうは必せんすらんとつねに心つかひせらる。  
もをかしき。いとつねなく何とも思ひたらぬやうにて  
たゆめ過すもをかし。にくきもの、あしきめ見るも。つみ  
はうらんど思ひながらうれし。さしむすはせてをか  
しけなるも又うれし。思ふ人は我身よりもまさりてうれ

「増」或云。たうはたふにて答なるべし。註は

甘心せず

道按。竊の字。たうのかなにてよし。落

くほにもあり

御前に人々所もなく 皇后定子の御まへに

道あけてちかくめし入

なみぬし人々の中をあけて清少をさほして

めしよせし

御まへに入々あまた

是より定子の御まへに侍し時の事を書し

さるゝ筆すさび

かくてもまばしあり

紙を大切に思ふからに遺世の心もやむと

命さへをしくなん

前にかた時あるべき心ちもせでさいへるに

對して。猶いつまでも世にながらへたき

と

おぼすて山の月は

清少の心は紙屋にこそ。何人かおは

捨の月にながさむぞこの御戲言。わが心

なくさめつさらしなやをばすて山にて

る月をみて

し。御前に人々所もなくあるに。今のほりたれば。すこ

しとはき柱のもとなどばるたるを御らんじつて。こち

こと仰られたれば。道あけて近くめし入たるこそうれし

けれ。御前に人々あまた物仰らるゝついでなどにも。世の

中のばらだ、しうむつかしうかた時あるべき心ちもせで。

いづちもくゝいさうせなはやと思ふに。たゞの紙のいと

しろうきよらなる。よき筆。白きまきし。みちのくに紙。など

えつれば。かくてもまばしありぬべかりけりとなんふは

え侍る。又かうらいべりのたゝみのむしろあさうこそか

に。へりのもんあさやかにくろうしろ見えたる。引ひる

けて見れば。何か猶さららに此世はえ思ひはなつまじと。命

さへをしくなんなると申せば。いみしくばかなき事も慰

むなるかな。おぼすて山の月はいかなる人のみるにかと

わらばせ給ふ。さふらふ人もいみしくやすきそくさいの

いのりかなといふ。さてのちにはどへて。すゞろなる事を

思ひて里にある比。めでたき紙を二十つゝみにつゝみて

給はせたり。仰事にはとくまるれなどのたまはせて。是は

さこしめしおきたる事ありしかはなん。あろかりれば。壽

命經もえかくまじけにこそと仰られたる。いとをかしむ

けに思ひ忘たりつる事を。おほしおかせ給へりけるは。な

はたゞ人にてだにをかし。ましてあるかならぬ事にぞあ

るや。心もみだれてけいすべきかたもなければ。たゞ

かけまくもかしこきかみのまるしにはつるのよはひに

なりぬべきかな

あまりにや あまりに冥加おそろしき體に

あまりにや

すゞろなる事を思ひて  
前にも清少の里居せし事あり。其比にや  
二十つゝみに  
【註】道按。二十は二幅をかながきにせるより  
の誤り。  
弘云。或は二重に包むことにて。即におぼ  
と假名にかきを誤りたるにもやあらん  
きこしめしおきたる事ありしは  
清少の紙に命のぶると聞召おかれてまいら  
せらるゝこと  
わろめれば壽命經もえかくまじけにこそ  
前に清少は白く清なる紙に慰む事なにい  
し故。此紙さはあられば命のぶるなぐまめ  
にもなるまじきこの心。壽命經は。延命  
の神の經なれば  
かけまくもかしこき  
細流云。かけて申さん恐あれどもこの心  
。掛長カケマケカシヨキ宣命の詞云  
々。哥の心は紙を神にそへて此かみのしる  
しに千年も生んぞや。主君の結へる紙なれ  
ばかけまくもかしこきなほいふ

あまりにや 前には中まわぬ  
あまりにやとけいせよせ給へてまらせつ。大はん所  
のさうしぞ御使には來たる。あをきひとへなどぞとらせ  
て。まこと此かみをさうしにつくりて。もてさくらに。  
むつかしき事もまざるゝ心ちして。をかしう心のうちも

たいみ  
是も清少の望みに應じて后宮の賜へるなるべし

御座さいふたいみ  
貴人のしつるい登さいふ心  
心のうちにはさしやあらん  
后宮の賜へるさ清少の心には思ひしごと

又いひに來なん  
これへまわらすたいみにあらすといひん

宮のほごりにあないしに  
后宮の御方などに問うかひまほしけれ

ど。誰かやうのわさばせんたい后宮の御  
しほごらんごん

「訂」こい「宮のほごりにあないしにまわら  
せまほしけれ」とあるを。イ木。萬壽抄  
には「さもあらばうたて有へしと思へば」と

あり  
かゝる事なんある  
清少より。疊もて察りし事を后宮の御心さ  
しつと問にやることば

さる事やけしき見給ひし  
后宮の疊下されし御氣色は見給はずやごん

のちにも  
後にも沙汰し給ふなごん

おもひしもしるくをかし  
前に心のうちにはさしやあらんと思へごん

もあり。おほせ事なめりさいみしうをかし  
なごいへる首尾なり

まごひしほごに  
其使はまごひ隠れて歸り  
ごん

關白殿  
后宮の御父。中關白道隆公也

法興院  
二條の北東極の東。兼家公の家也。

兼家公葬し給ひて後道隆公に。釋泉寺を  
たて給へり

女院  
圓融院の后。一條院の御母。東三條  
院也

二條の宮へいらせ給ふ  
法興院すなはち東二條也。こゝに后宮の御  
所をかりに作りしを二條の宮さいふなるべし

おほゆ。二月はかり有て。五位にやあかぎぬきたる男の。たゝみを  
もてきてこれといふ。清少のさかむるあれは誰ぞあらはなりなど物はし

たなういへば。さしおきていぬ。いづこよりぞとばすれ  
は。内衆などの問之使はいにしごん。疊をこまかりにけりどてどりいれたれば。こと更に御座とい

ふたゝみのさまにて。へりの事かうらいなごいとさきよら也。心のう

ちにはさしやあらんとおもへど。猶おほつかなきに。人ど  
も出しもの使を尋させしとめさすれどうせにけり。あやしがりわらへど

つかひのなればいふかひなし。所たがへなどならは。お  
のづからも又いひに來なん。宮のほごりにあないしにま

ゐらせまほしけれど。猶たれするにさるわさばせん。仰  
事なめりといみしうをかし。二日はかり音もせねば。うた

がひもなく。后宮の女房左京のきみのもとに。かゝる事なんある。さ

る事やけしき見給ひし。忍びてありさまの給ひて。さると  
見えすは。かく申たりともなもらし給ひそといひやりた

るに。左京ごんいみしうかくさせ給ひし事也。我しらせしさいふなごんゆめくまろがきこ

えたるごんなく。のちにもとあれは。されはよご。おもひしも  
しるくをかしくて。文かきて又みそかに御前のかうらん

におかせし物は。まごひしほごに。やがてかきおとしてみ  
はしのもとにおちにけり

關白殿二月十日のほごに。法興院の釋泉寺といふ御堂に  
て。一切經くやうせさせ給ふ。女院みやの御まへも。おほ

しますべければ。二月朔日のほごに二條の宮へいらせ給  
ふ。夜ふけてねふたくなりしかは。何事も見れず。つと

めて日のうらゝかにさし出たるほごにおきたれば。いと  
しろうあたらしうをかしけにつくりたるに。みすよりは

じめてきのふかけたるなめり。御しつらひ獅子こま犬な  
どいつのほごにや入るけんごぞをかしき。櫻の一丈はか

りにていみしう咲たるやうにて。みはしのもとに東にあれは。

つくりたるなめり  
 新古今雜上。後冷泉院御時御前にて蘇齋成  
 櫻花さいへる心なきあるを東野州院に作  
 花の事也云々  
 花の匂ひなききたるにおさらす  
 花のほのあかきな匂ひさいふ二「朝日影句  
 へる山の櫻花」さよめるもおな心二  
 こいへなごいふ物の  
 小宮さまをこぼちてそこに二條の宮を假に  
 つくられたればさ  
 けちかくをかしげなる  
 かりの御所なればさのみけ高くはあらねど  
 おもしろげなるさま二  
 只御なほしにかされてぞ  
 直衣も直衣布袴さて。下裳を用らるゝ事あ  
 れど。是は只直衣身なればなるべし  
 「訂」訂本には只なほしとありて御の字なし。  
 イ本の有に從へり  
 かたも入りうもん  
 堅紋立敷也。イ本かたも入りうもんなど其  
 折は此八丈さいふたけたはここになかり  
 き。あるかぎりきたれば云々  
 「訂」訂弘云。活本にも此のイ本の如くあり

いとどうさきたるかな。梅こそたゞ今さかりなめれど見  
 ゆるは。つくりたるなめり。すべて花の匂ひなききたる  
 におとらず。いかにうるさかりけん。雨ふらはまほみなん  
 かしと見るぞ口をしき。こいへなごいふ物のおほかりけ  
 る所を今つくらせ給へれば。木だちなどの見所あるはい  
 まだなし。たゞ宮のさまぞけちがくをかしけなる。殿わた  
 らせ給へり。あをにびのかたもんの御さしぬき。櫻のなほ  
 しに。紅の御ぞみつばかり。只御なほしにかさねてぞ奉り  
 たる。御まへよりはじめて。紅梅のこさうすきありもの。  
 かたも入りうもんなどあるかぎりきたれば。たゞひかり  
 みちて。からぎぬはもえぎ。柳。紅梅などもあり。御前に  
 させ給ひて。物など聞えさせ給。御いらへのあらまほしさ  
 を。里人にわづかひのぞかせはやと見奉る。女房どもを御  
 覽じわたして。宮に何事をあはしめすらん。こゝらめでた

なべすゑて 並居て

是家々のむすめぞかし  
 何もよき家の子ともぞさ  
 よくかへりみて、こ  
 懸にいたはりつかひ給へさの心二。陶淵明  
 彭澤の令となりし時。其子に一方を遊りて  
 いひつかはす書に云。今遣此力助。汝薪水  
 之勞。此亦人子也。可善遇之云々。この心に  
 て關白のものを給へるにや  
 いかにいやくものをしませ給ふ宮さて  
 后宮をさしての給ふ。關白の、たはふれ  
 ぬ。前段に后宮より清少に紙たひみな給  
 へりし事を書て。こい此御たはふれをか  
 く事。心づかひ面白し。史記陳平が傳に。  
 其あによめ陳平をにくみて悪口して兄伯に  
 逐棄られし事を書て。後に陳平が護る者。  
 高祖に其嫂を嫁せといひし。儒の證せし  
 文法二  
 何かしりうごには問えん  
 かやうの流儀を何は陰ごにはいはん。  
 御前にて、こいはめこの儀二  
 式部のせう何二  
 勅物云。源則理(正曆)正月十三日式部。前  
 大納言直光卿四男。正曆四年陸人十九。六  
 年叙。中宮御給

き人々を。なべすゑて御覽ごらんするこそいどうちやましけれ。  
 一人わろき人なしや。是家々のむすめぞかしあはれ也。よ  
 くかへり見てこそさふらばせ給はめ。さても此宮の御心  
 をほいか知奉りてあつちりまゐり給へるぞ。いかにい  
 やしく物をしませさせ給ふ宮さて。我は生れさせ給ひし  
 よりいみしうつかふまつれど。まだおろしの御ぞ一つ給  
 はぬぞ。何かしりうごにばきこえんなどの給ふがをか  
 しきに。みな人々わらひぬ。まことぞ。をこなりとてかくわ  
 らひいまするかばつかしなごの給はするほどに。内より  
 御つかひにて式部のせう何がしまるれり。御文は大納言  
 どのどり給ひて殿に奉らせ給へば。ひきときて。いとゆか  
 しき文かな。ゆるされ侍らはあけて見侍らんと給はす  
 れは。あやしうどおほいたり。かたしけなくもありもて  
 奉らせ給へばとらせ給ひても。ひろけさせ給ふやうにも

あなたにまかりて行くの事物し侍らん  
帝の御文を父君の前にて后宮開きかれ給へば。使の膝事いひ付んて殿下たち給ふ心遣ひ面白し

御そのおなすい  
后宮の紅梅のきぬさつみのいろこ

猶かうしもおしはかり

后宮の御ありさまかく美麗ならんとは。元推量すまじきこ。前に里人にわづかにのぞかせばやさいへる首尾こ

あがきみゆるさせ給へ  
我君御酒御免候へこ

三の御まへはみくしげ殿  
殿下の三女。后宮の御妹こ。御医殿別當なるべし。拾芥云。御医殿在三貞殿中。以上上臈女房。爲別當云々

うへなごきこえんにそ  
三の君おほきに物くしければ。うへつ

かたなご申べきには似合しき也  
「増」うへは敬語。貴婦人を何々の上さいふと源氏に榮上榮上なごいふが如し

いぶせき心ちす  
清少も新巻の内にて北の方の見え給はざりしこ

女房達の一切経供養の日の出たる鳥等の談合するこ

まろは何が只あらんにまかせてを  
にいごみて一向に手をつけぬやうにいふまこ。我は何が用意せん只あるにまかせん

こ云て。たゆめて結構せん心なり  
かいる事にまかつれば

當日の用意のために退出すれば。后宮も御いさまを給はるこ

御前人すくなくればいさよし  
「訂」イ本には「御前人すくなくいていさよし」あり

弘按。こは原本さイ本さほうらうへの相異なれど。此所は本のまゝの方よろし

なきてわかれんかほに  
拾遺集「さくらばな露にぬれたる色見ればなきてわかれし風そこひしき」

引たふし  
「訂」原本にたふしとあるは誤。上の九巻に。

おほきなる木ぞもたふれ一又此の下にもたふれぬべく。又下の十一巻にも。されどたふれず」とあるが如くたふさあるを正しければ改めつ

あらずもてなさせ給ふ。御よういなどぞありがたき。すみ  
うちより  
使にぬよの心  
のまより女房しとねさし出て。三四人御几帳のもとに  
開白の詞  
たり。あなたにまかりて行くの事物し侍らんとてたよせ  
給ひぬるのち御文御らんず。御返しはこうはいの紙にか  
しせ給ふが。御そのおなじ色に匂ひたる。猶かうしもおし

はかりまゐらする人はなくやあらんとぞ口をしき。けふ

はこと更にとて。殿の御方よりろくは出させ給。女のさう

なれば紫がらきめ  
細長前註貴女の眼

ぞくに紅梅のほそながそへたり。さかなよどあれば。あは

さまほしけれど。けふぞいみじき事の行幸に。あが君ゆる

させ給へと大納言どのにも申てたちぬ。君達などいみし

うけさうし給ひて。こうはいの御ぞもおどらじとせ給へ

るに。三の御まへはみくしげ殿也。中のひめぎみよりもお

ほきに見え給ひて。うへなごきこえんにぞよかめる。うへ

もわたらせ給へり。御几帳引よせて。あたらしくまゐりた

北方  
新巻の女房には北方見え給はるこ

る人々には見え給はねは。いぶせき心ちす。さしつどひ  
て。かの日のさうぞく扇などの事をいひあはするも有。又  
いごみかはして。まろは何か只あらんにまかせてをなご  
いひて。例の君などにくまゐる。よごりまかつる人もおほか  
り。かゝる事にまかづれば。えとゞめさせ給はず。うへ日  
々にわたりよるもおはします。君たちなどおはすれば。御  
前人すくなくればねはいとよし。内の御つかひ日々にも  
る。御前の櫻色はまさらで日などにあたりてしほみわ  
るうなるだに侘しきに。雨の夜るふりたる。つとめていみ  
りて悪くなるこ  
清少  
しうむどく也。いごくおきて。なきてわかれんかほに心  
おどりこそすれといふをきかせ給ひて。けに雨のけはひ  
しつるぞかし。いかならんとしておどろかせ給ふに。殿の御  
かたよりさふらひのものども。けすなど来て。あまた花  
のもとにたゞよりによりて。引たふしとりてみそかにい

まだくからんにされど  
作花に雨かいらば花損すて見にくからん  
思召て。人見ぬほどにされど仰付られしな  
るべし

いさをかしくて 花のあしくなりしをさら  
させたまふを感ずる心  
いはばいばなんさかれすみか事思ひたるに  
や

後撰「山守はいはいはなん高砂のなのへ  
の根をりてかさいん。」是は素性の哥也。兼  
澄の集にもある可勘也。此哥の心をおも  
ひて人はさかむるもならんさて引たなり  
ゆくかきの儀也

比の人なり 源兼澄にや。情明の息。寛和の  
いかに見るかひなからましと見て  
「訂」イ本には「いかにびんなきかたらならま  
しと思ふさもかくもいはで」とあり

あかつきぬす人  
「訂」万葉抄には「あかつきに花ぬす人」とあり

きて。まだくからんにとれどこそおほせられつれ。あけ  
過にけり。ふびんなるわきかなとくくとたふしとるに。  
いとをかしくて。いはばいはなんど。かねずみが事を思ひ  
たるにやとも。よき人ならはいはまほしけれど。かの花ぬ  
すむ人はたれぞ。あしかめりといへば。わらひていとゞに  
けてひきもていぬ。猶どのの御心はをかしようおほすかし。  
くきどもにぬれまるかれつきて。いかに見るかひなから  
ましと見て入ぬ。かもんづかさまりて。御かうし参りと  
のりの女官御きよめまりはて。おきさせ給へるに。  
花のなければ。あなあさまし。かのなははいづちいける  
と仰せらる。あかつきぬす人ありといふなりつるは。猶枝  
などをすこしをるにやとこそきつれ。たがしつるぞ。見  
つやと仰らる。さも侍す。いまだくらくてよくも見侍らざ  
りつるを。しるみたる物の侍れば。花ををるにやどうしる

いでよ侍らし  
いでよも殿の取づくさせ給ふには侍ら  
ト。春風こそ花の怨敵なれば侍つらん  
と。やさしき詞なるべし

ふりにこそふるなりつれ  
拾遺二人丸「我がごみや雲の中にもおもふ  
らん雨もなみだもふりにこそふれ」詞はか  
りされり

めづらしき事ならねど  
此后宮の御ありさまのめでたきをほむるは  
めづらしかられど。又此本哥の事をい  
ふ。此古歌めづらしかられど

我よりさきにこそ  
殿下しらざりけるよと仰せらるれども。清  
少見付ぬ已財より殿には御存知ならんと思  
ひしと。驚のなくれなきけ山ふかみ我  
よりさきに春はしりけり。詞ばかりをされ  
り。此歌新拾遺エハ思見。萬葉ニハ源信明

さりげなる物を 扱は人の引たふしける物  
たこと

めたさに申侍つると申す。さりとともかくはいかでかどらん。  
殿のかくさせ給へるなめりとしてわらはせ給へば。いでよ  
も侍らじ。春風にして侍りなんといひするを。かくいはんと  
てかくすなりけり。ぬすみにはあらでふりにこそふるなり  
つれと仰らる。もめづらしき事ならねど。いみしうめでた  
き。殿おはしませは。ねくたれのあさがはも時ならずや御ら  
んせんといひらる。おはしませすまに。かの花うせにける  
は。いかにかくはぬすませしぞ。いざななかりける女房達か  
な。しらざりけるよとおどろかせ給へば。されど我よりさ  
きにこそ思ひて侍るめりつれと忍びやかにいふを。い  
とどくき。つけさせ給ひて。さおもひつる事を世にこと  
人出て見付じ。宰相とそここのほどならんとかしばかり  
つとていみしうわらはせ給ふ。さりげなる物を。少納言は  
前前に春つどして侍らんを啓したる事に春つどして侍らんを啓したる事

そらごをおほせ侍  
殿の仰にて櫻のなかりしを清少知なが  
ら。春風のせしならんといひしはえらご  
か風におほせしご  
今は山田もつくるらん  
春風におほせし事の味吟之。實之樂ニ山田  
さへ今はつくるをちる花のつごは風に  
ほせざらん  
さばかりいましめつる物を  
くらからんほどに花をなれ人に見付られな  
さ仰付し物をさご。前にまだくらからんに  
されごそ仰られつれ。明通にけり。不似  
なるわざおほいひし首尾  
うるせ  
[訂]原本にはうるさくあり。古木井に異本  
にうるせくあるをよしとすべし。源氏傳  
木の巻にもうるせくといふ詞あり  
こわが君  
[増]源接。こわが君は幼穉の時の尊稱にてた  
れがうへにもいふ。うつは物語さしけ  
の巻にも。かれまのこをばすめのほど  
はこわが君といへり。又卷十一に。此若君の  
名を松若といへり  
それはいさく見て  
小若君の詞。清少と見付てさなり  
雨にぬれたりなご。前になきて雨に顔に心  
おほりこそすれ清少いひし事  
さて八日九日のほどに  
前に二月初日の程。二條の宮へいらせ給ふ  
ごあり。其二月の八九日比。此一切經供  
養は十日比なれば。后宮の御供の用意に清  
少退出する  
花の心開たりやいか

たし。后宮の御白ごの給ふ詞  
そらごをおほせ侍る也。今は山田もつくるらんと  
うちづんせさせ給へるもいとなまめきをかし。さてもね  
たく見付られにける哉。さばかりいましめつる物を。人の  
所にかよるしれものあるこそこのたまはず。春風はそ  
らにいとをかしうもいふかなとずんせさせ給ふ。たごこ  
とにはうるせくおもひより侍つかし。けごのさまいか  
に侍らましとてわらはせ給ふを。こわが君。されどそれは  
いととく見て。雨にぬれたりなご。おもておせなりといひ  
侍りつと申給へば。いみしうねたからせ給ふをかし。さ  
少の見たれば  
て八日九日のほどにまかづるを。今すこし近うなしてな  
ご  
ご仰らるれど出ぬ。いみしう常よりも長閑にてりたるひ  
るつかた。花の心開けたりや。いかいふどのたまはせた  
れば。秋はまたしく侍れど。よに此たびなんのほる心ちし  
侍るなど聞えさせつ。出させ給ひし夜車の次第もなくま

日の照に付て。しか雨にしほれし花の心も  
開けたるかご。古詩の詞なるべし追而可  
考  
秋はまだしく侍れど  
是亦かの花の心開けたりといふ古詩の詞な  
るべし  
車の次第もなく  
人々の品によりて乗車の前後次第あるべき  
を女房の急きて我さきにさるさま  
わなひあひて。可然上藤三人と清少と  
おしこりて。押渡也。おしこりなりて。人  
々あはて。乗車する  
かうかさいふに。車の奉行などのを。早是  
ばかりかさいふに。まだこにのらで有と  
清少などの答たる  
宮司。中宮大夫以下  
とくせんをのせんとしつる  
得選三人ありと。禁秘抄云。凡於三車寄  
乗車女房近代例也。得選不可然事也。  
行幸走内侍同車時聽之近代事也

づくとのりさわくがにくければ。さるべき人三人と。猶  
此車にのるさまのいとさわがしく。祭の歸さなどのやう  
にたふれぬべくまごふいと見ぐるし。たごさはれのるべ  
き車なくてえまゐらずは。おのづからきこしめしつけて  
たまはせてんなど笑ひ合てたてるまへよりおしこりて  
まごひのり果て出て。かうかといふに。まだこにといら  
ふれば。宮司よりきて。誰々かおはすと問聞て。いとあ  
やしかりける事哉。今は皆のりぬらんとこそ思つれ。こは  
てのりおくれ給ふでと  
なごてかくはあくれさせ給へる。今はとくせんをのせん  
としつるに。めづらかなるやなど驚きてよせさせ給は。さ  
はまづ其御志ありつらん人々のせ給ひて。つぎにもとい  
ふ聲聞付て。けしからず腹をたなくおはしけりなどいへ  
は。のりぬ。其次には誠にみづしが車にあれば。火もいと  
くらきを笑ひて。二條の宮に参りつきたり。みこしはとく

左京小左近 イ左京小左近昔女房の名なり

「此原本には右京とあれど。こは上にも左京とあれは左京とすべし。イ本にも左京とあり

まゐる人ごにみれどなかり 只今まゐる人々を左京小左近など尋見れども清少はまゐらざるこ

おるにしがひ四人づ 一車に女房四人づ乗れば。只今下車するに隨ひて。四人づいまりつとふこ

「此の十八字。イ本并に万載抄にはあやしなきか

いつのまにかうは年比のすまひのさまに 二條の宮ばかりの御所なるに。いつのまにかく年比住願給ひし所のやうにあるぞと感

りさある首尾なり さかくも申されは

申上ればまごひのりし人のあやまりあらは るればこ

ほさく ホトド

みづしがいさほしがりて 御所子が笑止がりて。おのが車にのせし

又なごかは心しらせらん物こそついまめ 心しらせ物こそ制する事をも遠慮せめ。右

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

いらせ給ひて。皆しつらひるさせ給けり。こゝによべと仰 右宮の清少を召之

られければ。左京小左近などいふ若き人々。参る人ごに イ小左近

みれどなかりけり。おるにしがひ四人づ御前にま また

りつとひてさふらふに。いかなるぞと仰られけるも いかに清少はまゐらぬぞと右宮の御

はしらぬ 跡に清少参りたるさま

仰らるにば。なごかく遅くとて引るて参るに。見れ 右京に左近など

は。いつのまにかうは年比の住ひのさまにおはしまし 清少の心

きたるにかとをかし。いかなればかう何かと尋ぬばかり 右宮の清少への給ふ詞

は見えざりつるぞと仰らるに。どかくも申さぬは。諸共 同車の上

に乗たる人。いとわりなし。さいはての車に侍人はいか 最果ていぢの心

でかどくは参り侍ん。是もほどくえのるまじく侍つる 清少の心

を。みづしがいとほしがりてゆづり侍つる也。くらう侍つ 右宮御間之車の窓

る事こそ佗しう侍つれと笑ふくけいするに。行事する 行の監製

物のいとあやしき也。又なごかは心しらせらん物こそつ 右衛門副たご制

まめ。うるもんなどはいへかしなど仰らる。されどいか 右衛門副たご制

でかはしりさき立侍らんなどいふも。かたへの人にくし 右衛門副たご制

と聞らんとときこゆ。さまあしうてかくのりたらんもかし 右衛門副たご制

こかるべき事かは。定めたらんさまのやんごとなからん 右衛門副たご制

こそよからめと。物しげに思召たり。おり侍るほどの待と 右衛門副たご制

ほにくるしきによりてにやとぞ申なほす 右衛門副たご制

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

かたへの人にくしと聞らん 右衛門副たご制

少のきいたるなり。前に清少の后宮の御尋 右衛門副たご制

にとかくも申さりし首尾なり。傍輩の遠 右衛門副たご制

慮なり 右衛門副たご制

定めたらんさまのやんごと 右衛門副たご制

車の前後定法のごとく正しからんこまよ 右衛門副たご制

らめとなり 右衛門副たご制

くるしきによりて 右衛門副たご制

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす

「訂」 訂 訂

申なほす 申なほす



御經の事にあす  
前の引つゞきなり。后宮釋尊寺へ渡御あら  
ん祭日の事なり  
みなみの院  
中關白殿の家也。前にも雨の院におはしま  
す比。西の對に殿のおはしますと有

裳の腰さし  
縫付などするさまなり  
かみなどいふ物はあすよりのちはらりがたけ  
に。明日を第一の晴と髪をけづりつくるふ  
さまなり

給へかなる  
〔訂〕原本には給へるなりとあり。然して活本  
には本文の如くあり。弘按。上になんの指  
辭あれば。此所になりとありては語格違へ  
り。故に今活本のかたに改めつ

扇もたせて尋問ゆる人ありつなどつぐ  
誰ともなく扇をもたせこして。清少はこい  
にかと尋し人ありしなど告げたるなり  
まて。まことにとらの時かときさうそき立て  
彼女房の早后宮はやがて御堂へ渡御といへ  
ば。清少もとく委らんと思へど。まてしはし  
と思ひ返して。誠に實の時に御出かと思へ  
ば明通たるとなり

御經のことにあすわたらせおはしまさんとてこよひまる清少おりのた  
るが只今まゐりしなり  
りたり。みなみの院の北おもてにさしのぞきたれば。高つ  
きどもに火をともして。女房違なりふたりみたりよたり。相よるべき同志なりさるべきど  
ち屏風ひきへだてつるもあり。几帳なかにへだてたるも  
あり。又さらでもあつまりゐて。女房のきり開重なりきぬともとちかさね。裳の  
腰さし化粧なりけさうずるさまは。さらにもいはず。かみなどいふ  
物は。あすより後は有がたけにぞ見ゆる。女房違清少に語るなり中宮御渡とらのときにな  
の事なり  
んわたらせ給へかなる。なか今までまゐり給はざりつ  
る。扇もたせて尋きこゆる人ありつなどつぐ。清少に告るなり清少の思案する心なりまて。まこと  
にとらの時かときさうぞきたちてあるに。出たつたるさまなりあけ過ぎ日もさし  
出ぬ。西の對車なりのからびさしになんさしよせてのるべきと  
て。あるかぎりわたどのへゆくほどに。まだうひくしき  
ほどなる今まゐりどもはいとつ。ましげなるに。西の對

三四のきみ 是も后宮御妹なり。三の君は  
教道親王の北方なり。四君は一條院の御く  
しげ殿と榮花物語に有

みな打われてだにあらば  
昔一度にのらばまぎれてもあらんを也。  
あまりあらはにて恥かしかりしをいはんと  
てなり

おぼゆ  
〔訂〕活本。おぼゆかしとあり  
からうして  
〔訂〕活本には。こうして」と有  
車のもとに 伊周と隆家のすだれあげての  
せ給ふ所の事なり  
されどたふれすこまではいきつきぬるこそ  
恥かしきにあゆむ心もせず。ころびぬべ

に殿すませ給へば。宮にもそこにおはしまして。まづ女

房。車にのせさせ給ふを御覽すとて。みすのうち高内侍の姪なりに寢。し

げいしや。三四のきみ。殿のうへ。其御をととみところた

ちなみておはします。車ひたりなりの左右に大納言三位中將二所し

て。すだれうちあげ下すだれひきあげてのせ給ふ。みなう

ちむれてだにあらば。かくれ所やあらん。四人づゝかきた

てにしたがひて。それく汗の流なりとよびたてゝのせられ奉り。あ

ゆみゆく心ち。いみしう。まことに淺ましう。けそ頭眩なりあらはなる心うなり

ともよのつね。みすのうち汗の流なりにそこの御目どものなか

に。宮の御まへの見ぐるしと御覽ぜんは更に侘しき事か

ざりなし。身よりあせのあゆれば。つくろひたてたる髪な

どもあがりやすらんとおぼゆ。からうして過たれば。車の

もとにいみしうはづかしげにきよげなる御さまどもし

て。うちゑみて見給ふも現うたならず。されどたふれずこそま

てはいきつきぬるこそ。かしこきかほもなきかとおぼゆ

れど。みなのりはてぬれば。引出で。二條のおほ榻なり牛をちにしち

たて。物見ぐるまのやう女院をむかへられしなりにてたちならべたるいとをか

し。人もさ他人もさやうにおもしろく見んと見るらんかすと心ときめきせらる。四位五位六

位などいみしうおほ女院をむかへられしなりいでいり。車のもとに來てつくろ

ひ物いひな女院の御むかへに。殿をはしめ奉りて。どす。先院の御むかへに。殿をはしめ奉りて。

殿上と地下とみなま女院御のち后宮出御なるべしりぬ。それわたらせ給ひてのち宮

は出させ給ふべしとあれば。いと心もとなしと思ふほど

に。日さしあがりてぞおは女院出御なりします。御車こめに十五。よつ

は尼の車。一の御車は一の車なり是女院の御車なりからの車なり。それにつゞきて尼の

くるま。しり口より一の車なり是女院の御車なりするさうのずゝ。うすゝみのけさころ

もなどいみしくて。すだれはあけず。下すだれもうす紫なりうすいろ

かりしたふれもせて車のもとまでゆきつ  
きしぞうれしかりしとなり  
しぢたて  
〔訂〕イ本しぢにかけて」とあり  
おほういでいり  
〔訂〕活本には。ひて」とのみあり  
まづ院を 女院なり。東三條院監子。一條院  
の御世なり  
〔訂〕イ本此の先院のとある上に左の如くあり  
「物いひなどする中に。あきのぶのあそんの  
心ちそらをあふきむれをそらいたり」  
御車こめに十五  
女院の御車といもの心の心なり。是女院が  
たの御車の敷をいふなり  
よつは尼の車 彼十五の内四は尼君達の車  
となり  
〔訂〕原本のもじなし。尼車とあり。今イ本に  
よりて補ひつ  
うすゝみのけさころも  
尼もむかしは薄鈍のころも着たるなり  
〔訂〕原本には。けさきぬとあり。イ本にけさ  
ころもとあれば。これに從ひて改めつ  
たいの女房の十 彼十五の内なり。第一の  
女院の御車。次に尼車四。次に此女房の車  
十。合て十五なり。是を御車籠に十五とい  
ふなり  
かとりかとりのうはき 桃華云。すゝしにて裏表  
あるさぬをいふなり

かすみわたるに。かすみわたれる程に」とあり

しうなまめかし。日はいとうらゝかなれど。そらはあさみ

どりにかすみわたるに。女房のさうぞくの匂ひあひて。い

みしきおり物の色々のから衣などよりもなまめかしう

をかしき事かぎりなし。關白殿其御つぎの殿ばらおはす

るかぎり。もてかしづき奉らせ給ふ。いみしうめでたし。

これら見奉りさわく此車どもの二十立ならべたるも。又

をかしと見ゆらんかし。いつしか出させ給はゞなどまち

きこえさするに。いかならんと心もとなくおもふに。から

うしてうねめ八人馬にのせてひき出めり。青すそこのも。

くたい。ひれなどの風に吹やられたるいとをかし。ふせん

といふうねめは。くすしあげまさかしる人なり。えびぞ

めのおりものゝさしぬきをきたれば。いと心ことなり。し

げまさは色ゆるされにけりと。山の井の大納言はわらひ

給ひて。皆のりつゞきてたてるに今ぞ御こし出させ給ふ。

かすみわたるに。かすみわたれる程に」とあり

朝の景氣なり

かすみのうは着の事なるべし

道隆なり

女院をかすつきまからせらるなり

后宮の女房車なり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

是より后宮出御の行列なり

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

かすみわたるに。かすみわたれる程に」とあり

かすみのうは着の事なるべし

道隆なり

女院をかすつきまからせらるなり

后宮の女房車なり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

是より后宮出御の行列なり

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

かすみわたるに。かすみわたれる程に」とあり

かすみのうは着の事なるべし

道隆なり

女院をかすつきまからせらるなり

后宮の女房車なり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

是より后宮出御の行列なり

采女の名なり

はじめて女院の御ありさまのめでたく見えしにいくいふべくもあらずとなり

めでたしと見え奉りつる御ありさまに是はくらぶべか

らざりけり。朝日はなぐとさしあがるほどに。木の葉のい

と花やかにかゝやきて。みこしのかたびらの色つやなどさ

へぞいみしき。御つなはりて出させ給ふ。御こしの帷子の

うちゆるきたるほど。まことにかしらの毛など人のいふ

はさらにそらごとならず。扱のちにかみあしからん人もか

こちつべし。あさましういつくしう。猶いかでかゝる御前

になれつかふまつらんと我身もかしこうぞおぼゆる。御

こし過させ給ふほど。車のしちども人だまひにかきおろ

したりつる。又うしどもかけて。みこしのしりにつゞきた

る心のためたう興ある有さまいふかたなし。おはしまし

つきたれば。大門のもとにこまもろこしのがくして。獅子

こま犬をどりまひ。さうの音つゞみのこゑに物もおぼえ

ず。こはいづくの佛の御國などにきにけるにかあらんと。

かすみのうは着の事なるべし

道隆なり

女院をかすつきまからせらるなり

后宮の女房車なり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

女院の御かたの人々をかすとみんとなり

是より后宮出御の行列なり

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

采女の名なり

ふせん

六政官の均のいまやうの  
やうは八朝にや。これ古き序文などの句  
なるべし。道而可考

「改訂」やうのには 野千の庭なるべし。  
野千は狐の異名(やかうさいふは字音の  
音便)即ち荒れはてし狐などの跋扈する  
庭さならいふ意ならむ。

かたへすいしからぬ風の  
六月より初秋まで、いに府宮のおはせしに  
や。古今ニ夏と秋と行かふ空の通路はかた  
へ涼しきかせやふくもん。此うたをうけて  
殘暑を云ふ

八日に瀆御の前の夜七夕。乞巧奠の事江  
次第にあり  
宰相中将登信  
長徳二年四月廿四日參議恒徳公の三男  
のふかつの中將 宣方六條左大臣重信公息  
人間の四月をこそ

白氏文集十六云。大林寺桃花  
人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開  
無二竟無不知轉入此中二來云々。此詩こそ  
は「いめ」也。三月廿日にあてはいはなる  
詩を「さい」はなるべし

でといふ物日ひと日おちかより。はちのすのおはきにて  
つきあつまりたるなど。いとおそろしき。殿上人日ごどに  
宿直に  
まゐり。夜もるあかし。物いふをきゝて。秋ばかりにや。太  
政官の地のいまやかうのにはとならん事をとすじ出たり  
し人こそをかしかりしか。秋になりたれど。かたへすし  
からぬかせの。所からなめり。さすがに虫の聲などはきこ  
えたり。八日ぞかへらせ給へば。七夕まつりなどにて。れ  
いよりちかう見ゆるは。ほどのせはければなめり  
是より別段三月廿日の事さき  
宰相中将たのぶ。のおかたの中將とまゐり給へるに。人  
々出て物などいふに。ついてもなくあすはいかなる詩を  
かといふに。いふかおもひめららしとこほりもなく。  
人間の四月をこそはといらへ給へる。いみしうをかしく  
こそ。過たる事なれど心えていふはをかしき中にも。女は  
うなどこそとやうの物わすればせぬ。男はさあらず。よ

ひきおろしてゐていり  
これ清少后宮の御前さくめしとせられて  
上臈の女房と等閑の盛めしつはれしはト  
めの事ないはる

ひきおろしてゐていり  
これ清少后宮の御前さくめしとせられて  
上臈の女房と等閑の盛めしつはれしはト  
めの事ないはる

「中給へば」  
「原」原本には。うし給へばとあり。イ本活本  
万歳抄。皆と中とあり。故に改めつ  
まだからの律も奉りながら  
御典の内にては后宮も愛からきめしたる  
にや

紅の御ぞよるしからんや  
后宮御装束に紅をめしたらばよるしからん  
トくやとめつらしき文林  
地すりの。地すりの。播磨などのたぐひ  
さうがつかれたる  
象眼。唐のきめの名也。桃葉御殿。御ほ  
そき泥繪などしたる

「増」榮花云。さうがうすもの「侍中御装  
束。下臈象眼」麗景景繪給云。ふたあいの  
さうが。又云ふかうさうのさうが。などあ  
り。谷川士清云。さすもの「名」  
それは殿の大夫の  
勳物云。云有長公。これより后宮の出御  
院の御供にきて  
女院の供奉にて人に見られし同し下臈をき

仰らるれば來たるに。思ひくまなきとてひきおろして  
てまゐり給ふ。さきこえさせ給ひつらんと思ふもかたじ  
けなし。まゐりたれば。はじめおりける人どもの物の見え  
ぬべきはしに。八人はかり出るにけり。一尺と二尺はかり  
の高さのなけしのうへにおはします。こゝにたちかくし  
て。あて参りたりと申給へば。いづらとて几帳のこなたに  
出させ給へり。まだからの御ぞも奉りながらおはします  
ぞいみしき。紅の御ぞよるしからんや。中頃からあやの柳  
の御ぞ。えびそめの五重の御ぞに。あかいろのからの御ぞ。  
地すりのからのうす物に。さうがつかれたる御もなど  
奉りたり。おり物の色。更になべてけるべきやうなし。我  
をはいかみみるとおほせらる。いみしうなん候ひつるな  
どもことに出てはよのつねにのみこそ。久しうや有つる。  
それは殿の大夫の院の御供にきて人に見えぬ。おなじ

おほしめすひもなき事  
后宮のまやうに被仰つらんは清少心  
御前へ  
上臈の  
御立の所に清少をかくすみて  
后宮の御さま  
是かのまだのかせ給はわから  
表すはう裏花田  
清少心  
同にほめんもよつれ  
句后宮の御前を待たれたること

て。又后宮の御供にもまゐらんは入目ゆる  
しとて。別に下儀を御堂殿の御供にせ給へる  
ゆゑそれを給へ行際もおそかりしとて

御ひたひあげさせ給へるさいし  
【訂】原註に「際次々御願のきほをいふなるべ  
し」とあるは非也

私按。さいしは銀子也。銀子は婦人儀式  
のとき前髪にさす具也。後世の櫛の類也  
兵衛督忠君

九條右大臣藤原公男。法興院關白家公也  
同母の弟なれば。道隆公の御をもちいふ也。  
【訂】弘云。忠君は原註には忠君とあり。又本  
文にはたゞ忠とあれど万壽抄ニよりて改  
めつ。大鏡并ニ藤氏系譜ニモ忠君は見ゆ  
れども忠尹は見えず

富小路左大臣。顯忠公也。顯忠公の次男。左  
衛門佐重輔のむすめ密相の君也

密相はあなになて  
后宮清少を近くめしよせんと思召せども。  
密相かくてあればかやうに被仰なるべし  
こゝに三人いさよく見侍ぬべし  
密相の詞也。中納言と密相と清少と三人あ  
らん也

殿上ゆるさるゝ内舍人  
百寮副要云。是は重殿上などのなる官也。昔  
け武勇を習はせけるほどに。内舍人をば。坂  
東國へつはせられるぞ。今はさやうの  
事もなし。本意をせしめて。殿上の簡に付は  
みな内舍人云々。清少は女にて元服せ  
で殿上ゆるされたれば。内舍人と准へ云々  
ふきかたり

【増】源云。今俗にいふ吹簾の吹の儀也

あいなくかしこき御事にかりて委けれと  
あぢきなくおそれおそれましき事にかりつらひ  
いひて。おそれおほけれと

あなかつけなき事などは又いかゞは  
主君の召上らるゝに。人のおもはくを懼り  
て。あらおそれおそれましき辭退申さんば。又い  
かゞなれば。御意のまゝに參上して。誠にも  
に過たるありさまも有けん也。是清少の  
出頭の人妬むほどに有し事をいふなるべ  
し

陣にちかうまひりけるまゝ  
后宮の御機數の前に。此日近衛司陣をひけ  
るを見えたり。其故に隆家陣に有し出立  
のまゝに弓箭を帯しておはせしなるべし  
でうごをおひて  
武官の調度弓服など。延喜式云。凡大儀は  
中將武冠。濃紺。錦袴。將軍帶。金  
裝積刀。策着。轡。云々

下がさねながら。宮の御供にあらん。わろしと人思ひな  
とて。ことば下がさね。ぬはせ給ひけるほどに。おそきなり  
けり。いとすき給へりなど。うちわらはせ給へる。いとあ  
きらかにはれたる所は今すこしけきやかひめてたう。御  
ひたひあげさせ給へるさいじに。御わけめの御ふしのい  
さゝかよりしてしるく見えさせ給ふなど。さへぞきこえん  
かたなき。三尺の御さちやうひとよろひをさしちがへて。  
こなたのへだてにはして。そのうしろにはたゞみ一ひら  
をながさまにへりをして。なけしの上にしきて。中納言の  
君といふは。殿の御をぢの兵衛のかみたゞきみとさきこえ  
けるが御むすめ。宰相の君とは富小路の左大臣の御孫。そ  
れ二人が上にあるて見え給ふ。御覽じわたして。宰相はあな  
たにるて。うへ人どものあたる所いきて見よと仰らるゝ  
に。心得てこゝに三人いさよく見侍ぬべしと申せば。さほ

御堂殿の好色の事

晴たる所にては猶后宮の御さまあやうしとて

御いたちのみならずその心

一枚

后宮の女房

長

是も后宮の女房

是も

后宮の御座のほりにおし

后宮の御

后宮の御

殿上人

密相后宮の清少をめしあげん御心を心得て

さあらばとて清少を召上る  
とてめしあけさせ給へば。しもにるたる人々殿上ゆるさ  
るゝことぬりなりとわらばせんとおもへるかといへ  
は。うまごへのほどぞなどいへば。そこに入らるて見るはい  
どおもだし。かゝる事などをみづからいふは。ふきかた  
りにもあり。又君の御ためにもかるゝしう。かはかりの  
人をさへおほしけんなどおのづから物しり世の中もど  
きなどする人はあいなくかしこき御事にかりてかたじ  
けなけれど。あな辱き事などは又いかゞは。誠にも身の程過  
りさまあらん也  
是より又女院などの御機數の事を云々  
院の御さじき所々のさじきども見  
わたしたるめでたし。殿はまづ院の御さじきにまゐりた  
まひて。まほし有てこゝにまゐり給へり。大納言二所三位  
の中將は陣ちかうまゐりけるまゝにて。てうごをおひて。  
いとつきくしうをかかうておはす。殿上人四位五位と  
事々しく  
ちたううちつれて。御供に侍ひなみるたり。入せ給ひて見

清少のめしあげら

し事を云々

馬副童のほり

法事のありさま

就語之身をふけり

清少のこまのものを

物知はして世をしとて人

可畏カシコキおそれましき事にかりたいふ

過分の身のあ

伊周と道頼と

調度武官の手道具弓箭など

關白殿后宮の御つたへ

○増訂枕草紙春曙抄卷之十一

今いらいけふはさ申給ひそ いらいけふ以来  
之。今より以來にも。けふはかく窮屈なる  
目見しと申給ひそ。各裳唐衣にて行儀  
正しき故也

〔訂〕原本にいらいけふはさあるは非之。イ本いらい  
さあるに從ひつ  
又云イ本にはけふはさの次に「入々しめ  
るはさ」の八字あり  
此なかの主君には  
此中には后宮こそ主上にておにせさ。御  
前に近衛を引て禁中のごくくなれば也  
〔訂〕此なかの主君にはの八字。活本には此し  
ふにはさあり

さらにもし又 清少の絹をかりたらば。若  
又僧にまごふまごふらんをの御たはふれ  
事也

さやうの物をきりしらめ  
清少のきめのやうなる物をきりたらしめ  
也

〔訂〕或云きりまめなるべし  
せいそつづのにやあらん  
法服にからんとの給ふきは。清僧都の衣  
の事也。清少納言なれば。姓をよびて  
清僧都との給ふ也。法よくにつきてのたは  
ふれ也

奉らせ給ふに。女房あるかぎり。も。からきぬ。みくしけ殿  
まできたまへり。殿の上は。裳のうへに高内侍こうちきをぞき給  
へる。繪にかきたるやうなる御さまども哉。今いらいけふ  
はと申給ひそ。三四の君の御もぬがせ給へ。此なかの主君  
にはおまへこそおはしませ。御さじきのまへにぢんをす  
るさせ給へるは。おほろけの事かどてうちなかせ給ふ。け  
にどみる人もなみだらまじきに、あかいろさくら御悦ひのゆゑの五重  
のからきぬを着たるを御らんじて。法服ひとくだりたら  
ざりつるを。にはかたまひしつるに。これをこそかり申  
を法服に御悦ひのゆゑかへき物をさ  
べかりけれ。さらはもし又。さやうの物をきりしらめたる  
にどの給はするに又わらひぬ。大納言殿すこしまどき  
給へるがき、給ひて。せいそつづのにやあらんとの給ふ。  
ひとこととしてをかしからぬ事をなきや。僧都の君あか  
色御子のうす物の御ころも紫紫のけさのけさ。いとうすき色の御ぞど

さ。しぬきき給ひて。ほさちの御やうにて。女房にさじり  
ありき給ふもいとをかし。僧綱の中に威儀具足してもお  
はしませ。見らるしう女房の中になどわらふ。父の大納  
言殿御まへより。松君あて奉る。えび染のありものよなほ  
し。こまあやのうちたる。紅梅のおり物などき給へり。例  
の四位五位いとおほかり。御さじきに女房の中松君にいれ奉  
る。何事のあやまりにかなきのしり給ふさへいとばえ  
らし。事ばじまりて一切経をばすの花のあかき一巻に經に一は  
なづに一巻にやいれて。僧ぞく上達部殿上人地下六位何くれま  
でめて渡るイもついみしうたふとし。大行道終日導師まあり。あか  
うきはし御悦ひのゆゑまちてまひなごする。日ふらし見るに目もたゆ  
くるしう。内の御つかひに五位の藏人まありたり。御さ  
じきのまへにあらたてゝるたるなど。けにぞ猶めでた  
き。夜とりつかた式部のせう即理前二註のり后宮への御使まありたり。やぶて

僧綱の中に威儀具足  
僧正。僧都。律師を僧綱といふ也。僧正に  
てまじませば。僧綱のなか威儀を正して  
こそおはさめ。殿に女房の中すたはふれ  
也。此時殿をさなるべし

紅梅のおり物 紫紅うらむらさき也

大行道導師まあり  
法會のさま也。大行道あり。導まありて  
其法事あるさま也

あぐらたてし  
胡床アキラ。腰ぐる床机のたぐひ也。ひ  
使座したるなるべし

宮は猶かへりてのち  
后宮のまづ即理禁中へかへりてのち入御あ  
らんぞ

た、仰せのまゝとていらせ給ひなごす  
イなんとす。帝の御意にしたがひ給へど殿  
もの給ひて。后宮入御あらんぞするこ  
ちのしほがまなごやう  
女院后宮と近くおはしながら御對面なかり  
し心にや「みちのくの千賀のしほがまらち  
ながらつらきは人にあはぬなりけり」  
殿後御の言ながら古言

きよく見えす  
世話にすぎ見えぬさいへる心なるべし  
あさやかなるきぬの  
經供養の時の出たちのまゝなるべし  
となぶることもしはれたり。いかにかく  
心なきぞ一人いへば。皆同じ心に從者な  
しがる故に。其詞をさなるこそく從者共  
がいはれたりしこ

夜さりいらせ給ふべし。御供にさふらへどせんじ侍りつ

どてかへりもまゐらず。宮は猶かへりてのちにどの給は  
すれども。又藏人の辨まありて殿にも御せうそこあれば

只仰せのまゝとていらせ給ひなごす。院の御さじきより。

ちかのしほがまなごやうの御せうそこ。をかしき物なご

もてまゐりかよひたるなごもめでたし。事はて「院かへ

らせ給ふ。院司上達部なご此たびはかたへぞ「かふまつ

り給ひける。宮は内へいらせ給ひぬるもしらず。女房のず

さごもは。二條の宮にぞおはしまさんとて。そこにみない

きゐて。まてどく「見えぬほどに。夜いたう更ぬ。内には

どのものもてきたらんとまつにきよく見えす。あさや

かなるきぬの身にもつかぬをさて。さむきまゝに。にくみ

はらたてどかひなし。つどめてきたるを。いかにかく心を

きどめどいへば。となぶることもしはれたり。又の雨露

り

たふとき物  
九條しやくぢやう。念佛のるかう

杉たてる門。神樂哥もをかし。今やうはながくてくせづき

なる。ふぞくよくうたひたる

九條錫杖 不空三藏の作一巻あり。是にふ  
しほをせを付て。聲明にする事。錫杖の  
聲なきは。一切衆生菩提心をおこし。諸  
佛もこれを持て成佛し給ふ。すべて功德ふ  
かきこわりをのべられし

念佛の廻向 光明廻向十方世界念佛衆生攝取不捨。觀經の廻向の文也。惡心尺云。廻三所作業一廻二向於彼一國之廻向。

今やうは 今様哥とて。備馬樂朗詠なごのやうに酒宴等にうたふ物也。慈圓の御作のいまやうた拾玉集にあり。古今者聞にもいまやう哥さま  
見えたり  
ふぞくよくうたひたる 風俗の詠物とてあり。拾芥風俗部云。鳴高又號三大宮。難波の都布良江。玉垂。知々良々。東路。筑波山。甲斐がれ。伊  
勢人。常陸哥。荒田。大島。八乙女。我門。是らうたひもの名なるべし

夏むしのいろ  
桃華葉に。裏のなきすすしの冠名を輝の  
羽色さいへり。其たくひにや

むらさきのこき。もえき。夏は二ある。いとあつち比夏虫

御心おちぬ 御心のおちつきたる心也。御  
童巻に女御も御心おちぬ給と有。  
〔訂〕さて此の次にイ本左の數句有「されどそ  
のなりめでたしと見奉りし御こころも。  
今の世の御こころも。見奉りくらぶるに。  
すべてひさつに申べきにもあられば。物う  
くておほりしこころもなごめつ

哥は 和言詠物等  
杉たてる門 古今「我庭はみわの山もと  
しくばさふらひきませ杉たてるかご」  
紙に世哥三輪明神云々  
神樂哥 内侍所の御神樂の詠物也。庭燎探  
物の哥等あり。探塵意案抄に。一條探塵の  
御註あり

今やうは 今様哥とて。備馬樂朗詠なごのやうに酒宴等にうたふ物也。慈圓の御作のいまやうた拾玉集にあり。古今者聞にもいまやう哥さま  
見えたり  
ふぞくよくうたひたる 風俗の詠物とてあり。拾芥風俗部云。鳴高又號三大宮。難波の都布良江。玉垂。知々良々。東路。筑波山。甲斐がれ。伊  
勢人。常陸哥。荒田。大島。八乙女。我門。是らうたひもの名なるべし

夏むしのいろ  
桃華葉に。裏のなきすすしの冠名を輝の  
羽色さいへり。其たくひにや

むらさきのこき。もえき。夏は二ある。いとあつち比夏虫

「増」後撰稿に輝を夏虫とよめる歌あり

百三十七段

かうそめ 香染云々  
男は何色のきぬも  
すべて男の出立は何色も似合さの心なるべし。イニ何色のきぬもきたれどあり。何色も着てあれくるしからしと云

百三十八段

ひのさうぞくの紅の單  
日の曉東を登の盤東といふ心にて。東帯の事。こいにいふは冠の下に着る紅の一種の事  
ねりいろのきぬもきたれど 練色のきぬをも勿論きるはきるなれどもさの心。練色は赤きなり前にあり  
白うてぞ まさりてこそ  
「訂」此のぞこそは下に結ぶ辭のあるべきを香きたる格なるべし  
活本にはこそなくしてまさりてにて結びたり。是は俗にてぞめさいふ格にて歌文共に此例あり

百三十九段

さるはかう思ふ人よろづの事にすぐれてもえ  
「訂」文字一つのせんさくもする清少なれども。人の上のみ沙汰して。みづからは万事にすぐれもえせずとの心

の色したるも涼しげ也

かりきぬは

かうそめのうすき。白き。ふくさのあか色。松の葉色したる。青葉。さくら。やあき。又あをき。ふち。男はなにいろのきぬも

ひとへは

白き。ひのさうぞくの紅のひとへ。あこめなどかりそめにきたるはよし。されど猶色きはみたるひとへなどきたるは。いと心づきなし。ねり色のきぬもきたれど。猶ひとへは白うてぞ。男も女も万の事まさりてこそ

あろき物は

詞の文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞもじ一つに心得がたくおもふ心。費之け高き。あやしくも。あてにも。やいしくもなるは。いかなるにかあらん。さるはかう思ふひとよろづの事にすぐれてもえ

さりとも人をしら下。たゞさうちおぼゆるもいふめり

人の上はいふさも。我すぐれずしては人の上をよくはしら下只ふささやうに打もふ故口にまかせていふならん云々  
其事させんさすといはんさいふを大事の羅織の事をいふさて。其事をさやうにせんさすさも。又はさいはんなどいふべき事な。さ文字をいひおとして。只いはんするさいひ。又は里へいでんするなどいへば。頼てあらぬ事に成て悪きなるべし。まして文を書てはいふべきにもあらず。只詞かいはたがへても悪きに。まして文を書たがへては。あさも何ともいふべきにもあらず云々

なほ不定本のまも  
物語の悪く書し所を直すも口なく。定本のまよなど書付たるもいさ口をし云々  
「訂」弘云。世にある枕草紙活本に二種あり。その古板は黒川真頼翁の職本にあれど此段にて大尾となりて。したがされは以下の文なし。少し新らしき活本(元祿頃の板)は小中村清矩翁職本にあり。是より以下終りまであり

したがされ 打下。打下。染下。染下。品々あり。公卿及禁色の人を綴る。非色の人を平綴る。胡背抄に綴る  
冬はつじ。桃華葉云々。禁色をゆるされぬ殿上人の平綴の下綴を彫る打下。染下。ふ。それも裏はふしつれにて染る。又二。染下。彫るは表すはう。うら背打云

百四十段

○増訂枕草紙春曙抄卷之十一

冬はつじ。かひねりがさね。すはうかさね。夏はふたあ。しらがさね



百四十一段

かいねりがされ 桃華云。振舞うらおもて紙。打。或はうら張。又云三色。自冬至春すはうがされ 桃華云。すはうの打下。本は打べきを。近代板引にする。すはうの色もふしかねにて染。又云夏の下。藤を蕨芳の下。藤と名付。表白堂裏流打。ふたあぬ。胡曹抄云。以三赤花及三青花。染之。無文殿或生平。非色人用之。或公卿着之。しらがされ 桃華云。白裏といふは。綾もしは平絹を。表裏白堂にして着す。或は表裏只。四月十月更衣の外は。暑月に着之。あをいろはあかき 青色の地紙には赤骨はえあふこいほをい。ろは黄黄色にや

百四十二段

ひあふぎ 桃華云。楡扇は二十五枚。若年の時は白糸にてとちて。糸のあまりを藤の花をおき物にして。かなめのうへより二三寸持所をのこすべし。束帯の時は又も楡扇を持也(身註)。これは一條殿男の楡扇をしるさせ給へるおもむき。女房の楡扇色々あり。さちもさまく。糸のあまりをあはひ給ひにして。花をむすびつけても用ぬ。かなめは。蝶鳥など金にてうち用ぬる。むもん 無地の事なるべし

百四十三段

松尾 三代實録十三日。貞觀八年十一月廿九日。進山城國松尾神階。加正一位。延喜式九日。山城國葛野郡松尾神社二階。廿二社次第曰。松尾大山神。市杵島姫神。今社家説曰。第一松尾社。第二月讀社。第三松尾社。第四三宮。第五宗像社。第六大神社。第七衣手社。八幡はこの國のみかぢ。入王十六代應神天皇にておはします。廿二社次第曰。八幡三所。應神天皇。神功皇后。玉依姫。貞觀元年九月十九日。行教和尚於男山峰一建立。中下皇

神は

松の尾。八幡。此國のみかぢにておはしましけんこそいとめでたけれ。みゆきなどになぎの花のみこしに奉るなどいとめでたし。大原野。かもは更之。いなり。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。さほどのなど云名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを。こは何する所ぞとひしか

百四十四段

大原野 支旨法印云。嘉祥三年に閑院左大臣冬嗣。わが兵神春日を勧請せられたり。猶廿二社次第に委。賀茂はさらなり。公事根源云。下鴨は御祖。上賀茂は別雷。此御祖の神を玉依姫と申。賀茂建角身命の女也。廿二社本條云。後一條院行幸の時。山城の國を寄進し給ふによりて。今は當國の惣社にてまします也。猶書々いなり。延喜式等前に註。公事根源云。かの社の福宜祝の祝には。和銅年中には。伊奈利山にあらはれ給ひけること。或は弘法大師東寺の門前にて。宿禰たる老翁にあひ給ひけるを。東寺の鎮守に勧請せられたること申説も侍る也。扱いなり。是は。宿禰書に。はし。春日。廿二社次第。第一。建甕槌命(常陸鹿島)。第二。登主命(下鳥香取)。第三。天兒屋槌命(河内平岡)。第四。姫大神(伊勢大神宮)。若宮。保護。以後。遣。神。殿。下。皇。猶。書。々。に。委。さ。ほ。ご。の。な。ご。い。ふ。名。さ。へ。佐。保。殿。奈。真。に。あり。淡。海。公。の。家。冬。嗣。の。大。臣。の。家。と。於。芥。一。行。り。平。野。延。喜。式。第。一。日。平。野。神。四。座。祭。今。木。久。度。神。古。國。神。相。殿。比。賣。神。猶。委。秋。に。は。あ。へ。す。古。今。一。千。早。操。神。の。い。が。き。に。は。ふ。葛。も。秋。に。は。あ。へ。す。つ。つ。る。ひ。に。け。り。貫。之。み。こ。り。の。神。三。代。實。録。二。日。大。和。國。宇。陀。水。分。神。吉。野。水。分。神。葛。木。水。分。神。云。々

崎は

からさき。いかに崎は。かけるふの日記。石山まうでの所にも見えて。近江なることあきらけし。みは。入雲云。近江。万葉まなかの浦云々。又曰。かほの崎出雲云々。兩所云。屋は。一條。國。御。説。四。阿。は。御。所。作。り。な。ご。の。あ。ま。だ。り。の。四。方。に。お。つ。る。云。云。ま。ろ。屋。あ。づ。ま。や。是。より。例。の。筆。す。ま。び。ん。時。そ。う。す。る。い。み。し。う。を。か。し。い。み。し。う。寒。き。に。夜。な。か。ば

百四十五段

まる屋 蘆の丸屋等。ちひさき。時。の。屋。を。云。時。そ。う。す。る。勢。勢。抄。云。奏。時。事。上。古。國。陰。陽。寮。酒。起。奏。之。近。代。指。計。職。人。仰。之。五。杭。以。後。爲。三。明。日。分。源。氏。興。入。云。亥。一。起。左。近。衛。夜。行。官。人。初。奏。時。終。子。四。起。下。皇。恩。〇。増。訂。枕。草。紙。春。曙。抄。卷。之。十一

案。禁中に夜時を奏する事あり。昔は陰陽寮の屬官に漏刻博士有て。十二時の一時を四刻にわけて漏刻を置て守辰丁とて。其漏刻を守る者有て。其時々に鐘鼓をうつ。夜に入て亥の一刻より左近衛夜行するに。官人亥の一刻のよし時を奏せし。丑の一刻より右近衛夜行す。桐壺卷に。右近のつきのとのぬまうしの聲きこゆるはうしに近りぬるなるべしといへるも是也。然るに近代順徳院の御時のころは。藏人さしほからひて時を奏せし。漏刻は銅盤に水を入て箭をたて。其箭に四十八刻をつけて。はせば一刻。二つあらはせば二刻。かくて四つあらはせば一時。其故に子一三四五。二三四などいふ。此漏刻の箭のきざの數。或は百刻にせし事もあれど。此草紙なとの比は四十八刻にや。すべて何れ四つのみぞくひはさしけるといへり。伊勢物語に子一つより五三つまでいふも是也。源氏大和物語等にも如此。れ九つうし八つなど。是よのつれの時をうつ數。子は九。丑は八時なれば。里人さやうにいへど。禁中に時を奏し。漏刻にしたかひて。何時も四つばかり也。清少まさしく后宮にみやつかへして見きたりし所をいへる詞也。里びたるは里めきたる。平人をさびたる人さいふ也。兵部式陰陽寮云。諸時二擊。子午ハ各九つ。丑未ハ八。寅申ハ七。卯酉ハ六。辰戌五。巳亥四云々。

成信中将は入道兵部卿の宮の御子  
源成信。兵部卿致平親王男。長徳四年左中將前代人のこゑをよよく聞しり給ひし人なり

りなごに時を奏する官人のしほぶき。香を引ありく也。弓弦を引ならず也。どして。なんけの何がし時うしむつねよつなごあてはか何家の何き名を名のふ。丑三奏。時は也。子四也。費也。なるこそぬいひて。どききのくひさすおこなごいみしうを時統二十時の時くに統きた事ありかの禁秘抄に丑統とある。かし。ね九つ。うし八つなどこそさびたる人はいへすべ。何もくよつのみぞくひはさしける或は深夜など也。是も禁中の御事を催の次手にかく。日のうらくとあるひるつかた。いたう夜ふけてねの時など思ひまゐらす程に。をのこと。もめしたるこそいみしうをかしかれ。夜中はかりに又御主上のふかせ給ふなるべし。ふねのきこねたるいみしうめでたし。

なほしすつたなどこそ  
成信の直衣姿のなかしけなりしこそ。さぞ女の別髪かりけんと思ひやりたる心をふくめたり。わろきはわろしなごのたまひしに。此なごさいふに心を付べし。やうの事なご様々物語し給ひし物をさ。例の書きたる文法。くすしうする。くすみて實法なる心之兵部が事。こゝろの子に成て。他家の平氏に養子に行て。平兵部といふべきを只もこの姓名をよびて若き女房などの笑ひし。いしきつたなどもかたき。風流の方の有かたき心。御まへに見ぐるしなど。后宮の御前などには此兵部が風流ならぬを見ぐるしと仰せられども。誰も意地わるく其御氣色を知て。兵部に告る人もなかりし。一條院つくられ。一條の南。大宮の東二町と拾芥に見えたり。つらき人をば更によせず。心淺き男などはよはさまで。式部といふ女房と清少のありし。式部のおも。后宮の女房。[註]原本には式部のおととあれど。イ本におもとあるをよしとすべし。今改めつ

はれなりけんことおほえしか。あかつきいにくとて。こよひおはしまして。有明の月にかへり給ひけんなほしすがたなどこそ。そのかみつねにるて物がたりし人のうへなどわろきはわろしなごのたまひしに。物いみなごくすしうするもの。なをさうにてもたる人のあるが。こと人きたる事。の子になりて平などいへど。たゞもとのしやうをわかき人々ことささにてわらふ。ありさやもことなる事なし。兵部とてをかしかたなごもかたきが。さすがに人などに物にさし出る心之奥に清少のつらふ中將と物いひし事あるをこめていへり。さしむじり心なごのあるは。御まへわたりに見るしなど仰らるれど。腹きたなくしりつる人もなし。一條の院つくられたる一間の所には。つらき人をばさらによせず。東の御門につとむかひて。をかしき小びさしに。式部のおもどももるもによるもひるもあれば。うへもつねに物御にちかく行かふ人もあれば。らんじに出させ給ふ。こよひはみなうちにねんとて。南の

うるさしなごいひ合て  
れてのいぢおきて戸あけん事うるさしと式  
部と清少いひ合せて。前につらき人をは  
更によせずさいへる首尾なり

やがてお付て物いふ  
彼兵部清少のちきぬ由を戸たたく男には  
むとて行ながら。やがて其男と語ふ  
まばしおおもふに  
しばらくおおもふに

權中將にこそあなれ  
戸たたく男をおしはかりて清少の式部  
いへる詞。權中將とは前の成信にや  
何事かをうはいふぞ

此兵部うちつけに何事を夜更るまでいふぞ  
やと。此中將は清少に心ざしてきたる人  
なるに。心あさき。しわざなればしる心  
なるべし  
例のひさしに  
前にをかしきひさしにさいへるゆゑ有り  
ひさしにさいふ

「訂」イ本「さらで」さあり  
なごていふにかあらん  
此の字やすめ字。兵部は何ぞてやう  
にいふ事ぞと清少のあやしむ詞

ひさしにふたりふしぬるのちに。 男の来て戸たたく いみしうたたく人のあ

るに。うるさしなごいひあはせてねたるやうにてあれば。 后宮の御詞 猶いみしうかしかましようよふを。あれおこせ。空ねならん

と仰られければ。此兵部きておこせと。ねたるさまなれ

は。更におき給はざりけりといひにいきたるが。やがての

つきて物いふなり。まはしかと思ふに夜いたうふけぬ。權 ひそかに式  
中將にこそあなれ。こは何事をかうはいふとて。只みそか 兵部  
にわらふもいかでかしらん。曉までいひあかしてかへり 兵部

ぬ。此君いとゆるしかりけり。さらにおはせん物いはい。 兵部  
何事をさはいひあかすぞなどわらふに。やり戸をあけて 是より兵  
女はいりぬ。つとめて例のひさしに物いふをきけば。雨の 兵部  
いみしうふる日きたる人なんいとあはれなる。日ごろお 人  
ほつかうつらき事ありとも。さてぬれてきたらば。うき 是より兵部  
事もみな忘ぬべしとはなごていふにかあらんを。よへき 是より兵部

同のあやしき字細をこむる詞  
のふの夜も。それがあなた夜の夜も。すべて此比はうちしき

り見ゆる人の。こよひもいみしからん雨にさばらできた

らんは。一夜もへたてじと思ふなめりとあはれなるべし。

さて日比も見えず。おほつかなくてすさん人の。かよる

をりにもこんをは。さらに又心ざしあるにはえせじとこ

そおもへ。人の心くなればにやあらん。物見しり思ひし 猶外にかよふ所

りたる女の心ありと見ゆるなどをはかたらひて。あまた 猶外にかよふ所

いく所もあり。もとよりのよすがなどもあれば。さげうし 雨

もえこぬを。猶さるいみしかりしをりにきたりし事など。 雨  
人にも語つがせ。身をほめられんと思ふ人のまわざにや。 雨  
それもむけに心ざしなからんにはなよまよかばさもつと 雨  
り事までも見えんともおもはん。されど雨のふる時は。た 雨  
ゞむつかしう。けさまではれしかりつるそらともお 雨  
ほえず。 次に月の夜さひくるがよき事をいはん にくくいていみしきはそどの、めでたき所ともお

さて日比も見えずおほつかなくて 彼兵部  
詞に日比おほつかうつらき事有ともさ 彼兵部  
いひしに答たる詞

人の心くなればにや 男  
男の心々にてさまくのしわざする物なれ 男  
ばと心。無雨夜などにくる事を次にい 男  
はんとて

「訂」人の心くなればにやあらん さあるを  
高麗抄には「人の心くなる物なればにや」 さあり  
さあり

ふすがなどもあれば も  
もさよりたりさたのむ本妻をいふ も  
人にも語つがせ も  
かやうの雨ふりてわりなき日しも来たりし も  
事。女に心ふかく思はせて。人にも語り も  
聞がせて。名聞がましくする男のしわざ も  
にやと

見えんとも思はん 少  
少は其女に心ざしは 少  
あるべけれどもと

こそおほゆれ  
【訂】イ本萬葉抄には此の下に「なかしきこと  
あはれなることもなきものか」とあり

月のあかききたらん人はしも十日  
イ本「月のあかきはしも。過にしかな行末  
まで思ひのこさる事なく。心もあくがれ  
めでたくあはれなる事たぐひなくおほゆれ。  
それきたらん人は十日二十日あり  
【訂】此段原本には上行につづけたれど。例の  
筆すまびにて別段のやうなれば。今改めつ  
演按。月あかきより別段すべし

さほく物思ひやられ  
期詠。三五夜中新月色。二千里外古人心。  
又。誰人離外久征戍。何處庭前新別離

こまの物たり  
今の世に傳らぬ物たりと見えたり。是も  
月夜のおもしろきことなはんて

もさ見しこまに  
大和物語に「夕ざれば道も見えぬ古郷は  
もさし駒にまつてぞゆく」後集にも  
ある也。此うたを詠吟せしまにや  
いさあはれ也

【訂】原本には「さあはれ也とあれど。イ本に  
よりに改めつ  
盈云。かこあはれ也とほ。かいとこありけ  
ん。いさのいの字おちしなるべし

ほえず。ましていとこらぬ家などは。とくふりやみねかし  
【訂】イ本萬葉抄には此の下に「なかしきこと  
あはれなることもなきものか」とあり

月のあかききたらん人はしも。十日。廿日。一月。もしは  
一年にても。まして七八年になりても。思ひ出たらんは  
いみしうをかしとおほえて。えあふまじうわりなき所。人  
めつゝむべきやうありとも。かならず立ながら物いひ  
てかへし。又とまるべからんをほとめなどしつべし。月  
のあかきみるばかり。とほくもの思ひやられ。過にし事う  
かりしもうれしかりしも。をしとおほえしも只今のや  
うにおほゆるをりやはある。こまの物たりは何はか  
りをかしき事もなく。詞もふるめき。見所おほからねど。  
此事の物たりあるにや。しみのさしたる願ふ  
月にむかしを思出てむしはみたるかはほりとり出て。も  
と見しこまにといひてたてるいとあはれ也。雨は心もど  
るに對していふ  
なき物と思ひしみたればにや。かた時ふるもいとにく

かたの少將もどきたるおちくばの少將  
是も雨の降につづけて來たりし古事をおいへ  
る也。おちくばの物語四冊有。中納言のむ  
すめあまたあるに。わかんどり腹の  
君見め心ばへすぐれしを御母にくみてひき  
所にすませておちくばの君と名付たり。  
それを右近の少將といふ人心ざしふかくて  
雨のふるよかひそめたり。其比交野の少  
將といふ人も此君に心かけたれど。早く右  
近少將の得給へるを。かたの少將もどき  
たる此草紙にはいふにや  
これもよべをさひひの夜もありしかばこそを  
かしけれ。あしあひたるぞ  
彼少將雨のふる夜かよひそめて又の日もお  
はしたり。さて三日の夜にあたりし夜。お  
ちくばの君に志有つてかふるあこぎといへ  
る女。さまんかまへて餅飯などを用意  
して待に。雨いたく降出したれば。少將今  
夜はえいくまきよしいひやり給へば。女  
君「世にふるなうき身とおもふわが袖のぬ  
れはしめける宵の雨哉」といひおこせしに  
少將れんや侘て。彼あこぎにかよふ帯刀と  
云男一人を具して。雨にぬれかちにて  
おわしたり。帯刀が曹子にてまづ水もて御  
足すますと彼物語りにあり。これを此草紙  
によべをさひひの夜も有しかばこそをかし  
けれとけるにや。又足洗ひたるかきたな  
き故も彼物にたりに委し見て了管あるべし

ぞある。やんごとなき事。おもしつかるべき事。たふどく  
めでたかるべき事も。雨だにふれはいふかひなく口をし  
きに。何か其ぬれてかこちたらんがめでたからん。けにか  
たの少將もどきたるおちくばの少將などはをかし。こ  
れもよべをさひひの夜も有しかばこそをかしけれ。足あ  
らひたるぞにくよきたなかりけん。さらでは何か。風など  
の吹あらくしき夜きたるはたのもしくてをかしうもあ  
りなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりごち  
て。しのびたる事はさら也。いとあらぬところも。なほし  
などは更にもいはず。かり衣うへのきぬ。藏人のあをいろ  
などのいとひやよかにぬれたらんは。いみしうをかしか  
るべし。ろうさうなりとも雪にだにぬれなほはにくかるま  
じ。むかしの藏人はよるなど人のもどなど。たゞあを色  
をさして雨にぬれてもしほりなどしけるとか。今はひるだ

ほえず。ましていとさらぬ家などは。とくふりやみねかし  
とこそおほゆれ

こぞおほゆれ  
「訂」イ本萬歳抄には此の下に「なかしきこと  
あはれなることもなきものか」とあり  
月のあかききたらん人はしも十日  
イ本「月のあかきはしも。過にし。た行末  
まで思ひのこさる事なく。心もあぐがれ  
めでたくあはれなる事たぐひなくおほゆれ。  
それきたらん人は十日二十日あり  
「訂」此段原本には上行につけたれど。例の  
筆すまびにて別段のやうなれば。今改めつ  
濱接。月あかきより別段すべし

さほく物思ひやられ  
歌詠三五夜中新月色。二千里外古人心。  
又。誰人龍外久征戌。何處庭前新別離

こまの、物がたり  
今の世に傳らぬ物がたり見えたり。是も  
月夜のおもしろきことはいはんとて

もと見しこまに  
大和物語に「夕ざれば道も見えぬ古郷は  
もと見し胸にまかせてぞゆく」後撰集にも  
ある也。此うたを詠吟せしこまにや  
いさあはれ也

「訂」原本には「いさあはれ也」とあれど。イ本に  
よりて改めつ  
盈云。いさあはれ也。いさあはれ也。いさあはれ  
ん。いさあはれ也の字おしなるべし

月をあかききたらん人はしも。十日。廿日。一月。もしは  
一年にても。まして七八年になりても。思ひ出たらんは  
たらんはなかしらん  
いみしうをかしとおほえて。えあふまじうわりなき所。人  
めつゝなべきやうありとも。かならず立ながら物いひ  
てかへし。又とまるべからんをほとめなどしつべし。月  
のあかきみるはかり。とほくもの思ひやられ。過にし事う  
かりしもうれしかりしも。をしとおほえしも只今のや  
うにおほゆるをりやはある。こまの、物がたりは何はか  
りをかしき事もなく。詞もふるめき。見所おほからねど。  
此事の物がたりにあるにや  
月にむかしを思出てむしはみたるかはほりどり出て。も  
と見しこまにといひてたてるとあはれ也。雨は心もど  
るに對していふ  
なき物と思ひしみたればにや。かた時ふるもいとにく、

かたの、少將もどきたるおちくばの小將  
是も雨の降につけて來たりし古事はいへ  
る也。おちくばの物語四冊有。中納言のむ  
すめあまたあるに。わかんどりの腹の  
君見め心ばへすぐれしを離母にくみてひき  
い所にすませておちくばの君と名付たり。  
それを右近の少將といふ人心ざしふかくて  
雨のふるよかよひそめたり。其比交野の少  
將といふ人も此君に心かけたれど。早く右  
近少將の得給へるを。かたの、少將もどき  
たるも此草紙にはいふにや  
これもよべをいひの夜もありしかばこそな  
かしけれ。あしあひたるぞ  
彼少將雨のふる夜かよひそめて又の日も  
はしたり。さて三日の夜にあたりし夜。お  
ちくばの君に悲有てつかふるあこぎといへ  
る女。さまんかまへて餅飯などを用意  
して待に。雨いたく降出したれば。少將今  
夜はえいくまよきしいひやり給へば。女  
君「世にふるをうき身とおもふわが袖のぬ  
れは下めける管の雨哉」といひなせしに  
少將れん十作。彼あこぎにかよふ帯刀と  
云男一人を具して。雨にぬれくちにて  
おわしたり。帯刀が曹子にてまづ水もて御  
足すますと彼物語りにあり。これを此草紙  
によべをいひの夜も有しかばこそなかし  
けれとけるにや。又足洗ひたるがきたな  
き故も彼物がたりに委し見て了管あるべし

ぞある。やんごとなき事。おもしろかるべき事。たふとく  
めでたかるべき事も。雨だにふれはいふかひなく口をし  
きに。何か其ぬれてかこちたらんがめでたからん。けにか  
たの、少將もどきたるおちくばの少將などはをかし。こ  
れもよべをいひの夜も有しかばこそをかしけれ。是あ  
らひたるぞにくきたなかりけん。さらでは何か。風など  
の吹あらくしき夜きたるはたのもしくてをかしうもあ  
りなん。雪こそいとめでたけれ。忘れぬやなどひとりごち  
て。しのびたる事はさら也。いとさらぬどころも。なほし  
などは更にもいはず。かり衣うへのきぬ。藏人のあをいろ  
などのいとひやうかにぬれたらんは。いみしうをかしか  
るべし。ろうとうなりとも雪にだにぬれなほにくかるま  
じ。むかしの藏人はよるなど人のもとなど。たゞあを色  
をきて雨にぬれてもしほりなどしけるとか。今はひるだ

青色をきめぬ。緑彩ミトリノタモト  
にきぎめり。只ろうとうをのみうちかつきためれ。あふな  
衛府の衛門兵  
衛のたぐひに蔵人の衛府を兼ていみかりし物を  
雨にくる人は日比のつらさ  
どのきたるはましていとをかしかりし物をかく聞て雨  
も忘るる兵部が詞をきいては  
ありかぬ人やあらんずらん。月のいとあかき夜。紅の  
紙のいみしうあかき。たゞあらずとも書たるをひさし  
別の體もなけれど御見まひになど書たる心  
にさしいれたるを。月にあてし見しこそをかしかりしか。  
月に見る興なごはあらんや

雨ふらんをりばさはありなんや  
是より別段  
つねに文おこする人の何かはいまはいふかひなし。  
は文なもやうと  
まはなごいひて。又の日おともせねは。さすがにあげたて  
つれなくて過しつらさす  
は文の見えぬこそさうさうしけれと思ひて。さてもきは

ふしかりける心かななどいひてくらしつ。又の日雨い  
たうふる。ひるまで音もせねは。むけに思ひたえにけりな  
男のたえたるをさすかに危たる心  
どいひて。はしのかたにるたる夕ぐれに。笠さしたるわら  
待たれしゆゑ  
はのもてきたるを。つねよりもとくあけてみれば。水ます

雨のとある。いとおほくよみ出しつるうたごもよりはを

あけたてば文の見えぬ  
夜明れば文もてきし物の。けさは文も見え  
ればさびしきぞ。古今「あけたてば蟬の  
かりはへ鳴きくらしよるは盛のもえこそ明  
せ」さよめる詞

水ます雨の 古今「まこもるよごの河水  
雨ふればつれよりこにまざる哉こひ」此  
うたを尋せる詞にや猶可考

あしたはさしもあらす  
あしたはさしも見えざりし心  
あはさし見えざりつるそのとあり  
さえつるそのいとく

あしたはさしもあらす  
あはさし見えざりし心

かし。たゞあしたはさしもあらす。さえつるそのいとく  
らうかきくもりて。雪のかきくらしふるに。いと心ほそく  
見出すほどもなくしろくつもりて。猶いみしうふるに。随  
身だちてほろやかに。びびしきをこの。からかさとして。  
美々しき  
そはのかたなる家のとより入て。文をさしいれたるこそを  
戸  
かしけれ。いとしろきみちのくにがみ。しろき色紙のむす  
むすひ  
べたる。うへにひきわたしけるすみのふと氷りにければ。  
すそうすになりたるを。あげたれはいとほそくまきて。む  
すびたるまきめはこそとく。とくほみたるに。すみのいと  
くろううすく。くだりせはに。うらうへかきみだりたるを。  
まして  
うちかへし久しう見ること。何事ならんと。よそにて見や  
りたるもをかしけれ。まいてうちほゝるむ所はいとゆか  
しけれど。とほうるたるはくろき文字などはかりぞ。さな  
容観よき女  
めりとおほゆるかし。ひたひがみながやかに。おもやうよ

色紙のむすべたる

「訂」イ本むすびたるとあり。さてはよく解さ  
れたり。然れども此のむすべのべははれの  
約言にもや。さらば本のまゝにても聞ゆべ  
し

ひきわたしけるすみ  
封十目の墨なるべし。墨ひく内に筆の氷た  
るさま。珍しく面白き文牒にや  
こま／＼さくばみ 紙のたゞまれてくばみ  
し

くだりせばに 行の間せばく細かに書し  
うらうへかきみだり  
うらおもてに書みだしたる

うちほゝるむ所はゆかしけれど  
文みる／＼少笑ひたるは何事書し所ぞか  
たはらよりゆかしき心

さなめりとおほゆる  
その事とおほはる心。それなりけり  
さいふにおな



こゝ人の来て炭いれておす。心もなき外人の。火桶の消がたる故に。め  
たさ炭をつみかされなごしたるが。火桶の  
内されいならぬをにくめるにや其心次の  
に見ゆ

中に火を云々  
「訂」演云。此所の傍註に原本灰はさあり。こ  
は炭はの誤也

れいなち御つうしまわらせて 常は雲の  
物見に格子を上るにけふは寒氣ゆゑ御格子  
おろさせたる也

かうろほうの 香爐半雪面白き所なれば  
くの給ふ也。此爾后宮なるべし。但基後の  
悦目抄には一條院の勅旨あり

みす高くまきあげ  
朗詠遺愛寺鐘歌枕題。香爐家雲接履者。  
白樂天の詩也

此宮の人には 時の人清少をほめて此旨宮  
の御方にては可然人といふ也

「増」傍註云。夫などの清少をほめて。此宮の  
御方にさふらふ人なれば。さるふることを  
も知べき事といふ也。註は少かたひて  
開ゆ

陰陽師のもさなる  
これより又別段

るこそいみしううれしけれ。物などいひて火のきゆらん  
もしらずるたるに。こと人の来て。すみいれておこすこそ  
いとにくけれ。されどめりにおきて中よ火をあらせ  
たるはよし。みな火を外さまにかきやりてすみをかさね  
かきたるいな。きに火どもかきたるかいとむつかし  
雪いとたかく降たるを。れいならず御格子まらせて。す  
びつに火おこしてもの語などしてあつまりさふらふに。  
少納言よかうろほうの雪はいかならんと仰られければ。  
みかうしあけさせて。みす高くまきあげたれば。わらはせ  
給ふ。人々も皆さる事はしり哥などにさへうたへと思ひ  
こそよらさうつれ。猶此宮の人にはさるべきなめりとい  
ふ

陰陽師のもさなるわらばこそ。いみしく物はしり  
たれ。祓などしに出たれば。さいもんなどよむ事人はなほ

のみなす利口なるさいはんさて  
こそさけ。そとはしりて。しろき水いかけさせよともいは  
ぬ。しありくさまの。れいしり。いさかまうに物いは  
せぬこそうらやましけれ。さらん人もがな。つかはんとこ  
そおほゆれ

三月はかり物いみしにてかりそめなる人の家にいきた  
れば。木などもなごはかたしからぬ中に。柳といひて例の  
やうになまめかしくばあらで。葉ひろう見えてにくけな  
るを。あらぬ物なめりといへば。かゝるもありなどいふに  
さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふする  
宿かな

どこそ見えしか。其比又おなじ物いみしにさやうの所に  
出たるに。一日といふひるつかたいとつれくまざり  
て。たゞ今もまありぬべき心ちするほどにしも。おほせ事  
あれば。いとうれしくて見る。あさみどりの紙に。宰相の

「訂」人もは原本人を作る。古鈔本にはも  
あり

弘按。なごまはまされ易きも下なれば  
りしならん。今改めつ

物いみしにて  
深くつしむべき物忌には常の居所を去て  
外にうつる事ある也

葉ひろう見えて  
爾雅云。楊。蒲柳也。詩義疏云。蒲柳之木二  
種。一種皮正青。一種皮紅正白葉皆長廣。似  
柳可爲三節寄。廣志曰楊一名高皮。木葉大  
於柳也

さかしらに柳の  
さかしらに賢だてなる心也。風流なるべき  
柳のなま下ひに賢立て。此楊の葉廣りに  
くげなるは春の面伏也。柳の眉といふよ  
り面と云は縁語也

いとつれくまざり  
前につれくなる物。所さりたる物忌とあ  
り



いかにして過にし

此後宮の御歌。千載集の調書云。一條院御時  
皇后宮に。清少納言始めて侍ける比。三月平  
に三日まかり出侍けるに。彼宮よりつわ  
はされて侍けるごあり。此始て侍けるごい  
ふに心を付へし。二三日清少の侍らぬさへ  
さびしきに。其已前は河さしてくらせしぞ  
さへ

後拾遺二。くくるいまはちさせを過す心らし  
てまつばまごまに久しかりけり」

我返歌を奉らん事とは覚えぬこそ。我なが  
ら臆したれこの心

清少のさびしきは。住所からと斗思ひ侍て。  
后宮の御つれんを。しらで里居し侍し事  
この心也。とくまぬるべき心をよくめたる  
歌之。此返歌も千載集に入

こよひのほども少將にや  
百夜かよへさいひし女もさへ。九十九夜  
ゆきて。今一夜を待あへずしてうせたりし  
深草の少將の世がたりにていへる詞にや  
清少も早く登たき心いられに。さ夜一夜を  
待たれてうせやし侍らんごなるべし  
くらしかれけるこそ。清少を待かれて后宮  
のくらしかれ給ふさいへるやうなるを。あ  
まりうけりたる事さばはふれの給

「訂」弘云。此所のこそ。指辭。結びの辭なし。  
いさにくしはいさにくしけれの誤にや  
まごまにさる事や。實にさやうの遺慮も思ひわかざりしよと例のふくめたる詞

「訂」事やを原本には事に作れり。さばはいさく結尾の語法也。誤字にやあらんと思ひしに。原本には事やごあり。こよひの世のやにて事  
の誤也。かくあらんにはよく解し得らるへければ。今改めつ

清水に。元眞集に「清水の山郡公聞つれば  
我古柳の壁にかはらむ」

山ちかき入相。副歌。おほ寺の入相の鐘の  
聲ごまごまみしに少かへたる上句也。ま  
て此哥は清水なれば山近きと云。鐘の聲々  
に付ても我が清少を戀る思ひの歌は思ひし  
らんを。つれなくも久しき長居哉と哥に  
ふくめ給へる餘意を次の詞にあらはしてか  
きつづけ給へるさま

こよなの。無題と書之。これにます事なき  
心之

はちすの花びら。散花の花びらなるべし  
まわらす

「訂」是もまわらすとあるべき所なるをかくあ  
るは異格なれど。こは重結の格と見るべし。  
かやうの所も此書には三四か所あり

そやの御導師聞て  
初夜のおこないすみて禪衆の退出は夜半も  
過る比ならんご云。江次第十一。御佛名のさ  
ころに云。初夜の御導師某大法師自三亥二  
刻に至り一刹

たるひのいみじしだり

雪氷軒のつらゝのたれさがりし

「増」したりは和名響之。就文云。響は屋簷前  
雨流下也。音響。和名阿万之太利とあり

〇増訂枕草紙春曙抄卷之十一

女房

さみいどをかしくかき給へり

后宮の御つた。清少のまわらすりし已前は河さして過せしと云。千載集にはくらしむを  
いかにして過にしとをすらしけんくらしむつらふま  
てふごあり

のふけふかな

宰相より私のせうそ。清少を待侍るさま  
どなん。わたくしにはけふしもちとせの心ちするを。曉だ  
てすも早く参れと云。宰相のせうそ。斗にてと云

にどくごあり。此君のの給はんだにをかしかるべきを。ま  
して仰せことこのさまにはおろかならぬこちすれど。け  
いせん事とはおほえぬこそ

清少の返歌  
雲のうへにぐらしかねける春の日をところからともな  
がめつる哉

宰相への返事にはと云  
わたくしには。こよひのほども少將にやなり侍らんずら  
んとて。あかつきにまらりたれば。さのふの返し。くらし  
かねけるこそいとにくし。いみじうそしりきととおほせら  
る。いと佐しうにさる事や

清少の返歌  
がめつる哉

是も后宮より御せうそありし物たりと云  
清水にこもりたるころ。ひぐらしのいみじうなくをあは  
れどきくに。わざと御使しての給はせたりし。からのかみ  
のあかみたるに

后宮の御つた

山ちかき入あひのかねのころごごにこふるころのか  
ずはしるらん

哥よりこよまによみつけて心得へし  
ものをこよなのながるやどかへせ給へる。紙などのなめ  
けならぬもどり忘れたるたびにて。むらさきごなるはちす  
の花びらにかきてまわらす

十二月二十四日。宮の御佛名のそやの御導師聞て出る人  
は夜なかも過ぬらんかし。里へも出。もしは忍びたる所へ  
も夜のほど出るにもあれ。あひのりたる道の程こそをか  
しけれ。日ごろ降つる雪のけさはやみて風などのいたう  
吹つれば。たるひのいみじうしたり。つちなごこそむら  
くくろきなれ。屋のうへはたうおしなべてしるきに。あ

〇増訂枕草紙春曙抄卷之十一

しづの屋もおもかくして  
殿の家の見苦しきも雪にかくしたる心。  
見にくき顔などを物にておほひかくすを面  
隠しといふ。  
かれなごおしへぎ 雪の月に映したる。  
銀をうすく片たるやうに

下すだれもかけぬ  
車の簾の下にすこのきぬなどをかくるを  
下すだれといふ。  
うす色 桃葉葉葉に。薄色。たて紫のき白雲  
こうばい 雲紅梅葉葉云々

山吹 冬やまぶきなるべし。桃花御説に。花  
山吹。冬山吹さといふ。表は薄紅葉葉云々

とトキみのさ  
和名ニ。賦ケルモノトシキミ。説文云。賦車  
前也  
月影のはしたなさに  
女の面助しくおもへるさまなり。清少のみ  
づからいへるなるべし

やしきしづの屋もおもかくして。有明の月のくまなきに  
いみしうをかし。かねなどおしへきたるやうなるに。水品の空  
つらいのさま  
しやうのくきなどいはまほしきやうにてながくみじか  
く。ことさらかけわたしたると見えて。いふにもあまりて  
めでたきたるひに下すだれもかけぬ車のすだれをいとた  
かくあけたるは。おくまでさし入たる月に。女の装束のさま  
いしろきなど七八はかり着たるうへに。紅の遺  
あさやかなるつやなど。月にはえてをかしう見ゆるかた  
はらに。えびぞめのかたもんのさしぬき。白ききぬどもあ  
また。山吹くれなるなどきこほして。なほしのいと白きひ  
きときたれば。ぬぎたれられていみしうこほれいでたり。  
さしぬきのかたつかたは。とじきみのとにふみ出された  
るなど。道に人のあひたらはをかしと見つべし。月影のは  
したなさに。うしろさまへすべり入たるを。ひきよせあら  
男の引よせて女の

りんくとして  
同歌。八月十五夜。桑旬之一千餘里。露々  
露。露々は露。月のおきらかなる影のう  
つれるは露の露。田面にさむく冷しき水  
を敷たるやうなりと。  
宮の内のはし  
后宮などの内殿外さまのはしつがたの事な  
ごをほめ語る。其はむるは我主君のうへ  
にてあるを聞。又我妻などの事にて聞が  
しきと。  
【訂】イ本には。宮の内さのばらとあるを。清水  
本には。此方をとりて。掖掖。宮の内(句)さ  
のばらの事ともなるべし。といへり  
是もよろしやうと。さては弘按。宮の内  
の殿原の事ども女房達の互にうはさして  
語り合ふを各々の主君。または其女房の  
主にて聞くのが。おしきとの遺にや

かほをあらはになす  
はになされて笑ふをかし。りんくとして氷りしけり  
といふ詩を返す。とすんじておはするはいみしうをかし  
うて。夜一よもありかまはしきに。いく所のちかくなるも  
口をし。  
是また別段  
みやづかへする人々の出あつまりて。君々の御事めでさ  
たると。  
こえ。宮の内外のはしの事どもかたみに語り合せたるを。  
かのが君々其家あるに。て聞くそをかしけれ

家ひろくきよげにて  
是は前段に宮づかへ入里亭に出あつまるむ  
いひし次手にさやうの里亭のよきを待て  
宮づかへ人をあひすみかたりひて有度事を  
いふなり

又むつましうくる人もあるは 彼分やづか  
へ人のしたしき人の見まふには  
まゐらん折は 彼宮仕へ人の主望の御かた  
へまゐる時は  
其事見れて思んさまにし 主君へまゐる  
用意の物など見あつかひて思ふやうにした  
てやらまほしきこと  
よき人のおはします御ありさまなど 彼宮  
仕人の内まゐりに付て 貴人の御さまのゆ  
かしきまほしき心ないふ

あくび よくうつる物  
ちごども をさなき物はよく物を見習ふ  
故の 武母の三たび隣をうつし、事などおも  
ふべし  
なまけしからぬえ物 身はいやしきなが  
ら 貴人のまねをこのむものないふ  
【訂】イ本此の次に あしと人はいはるゝ人。  
さるはよしとせられたるよりはうらなくぞ  
少ゆる」の三十二空あり

家ひろくきよげにて。親族二門の人と相住はいふにおよばずと 友なふ人にせ  
んにはさ  
ひなどする人には。宮づかへ人かたつかたにすゑてこそ  
あらまほしけれ。さるべき折はひと所にあつまりて物  
がたりし、人のよみたる哥何くれどかたりあはせ。人の文  
などもてくる。もろともに見。返事かき。友だちにて思ひ人にてしと  
る人もあるは。きよげにうちしつらひていれ。雨などふり  
てえ歸らぬもをかしようもてなし。初 まゐらん折は其事見入  
て。思はんさまにしていたしたてなごせはや。句 よき人のお  
はします御ありさまなどいとゆかしきぞ。我ながらいふこと けしからぬ心  
にやあらん」

見ならひする物

あくび。ちごども。なまけしからぬえせもの」  
うちとくまじきもの

百四十八段

百四十七段

さるはよしとせられたるよりは、さやうの悪き者は世によき人といふ人よりはうらなく見えて、内心のもしげなしと

あしと人にいはるゝ人。さるはよしとせられたるよりはうらなくぞ見ゆる」

舟のみち。日のうらゝかなるに。海のおもてのいみしうの

どかに。あさみどり昔海のさま遠縁のきぬのうたたるをのべたるやうとたるを引わたしたるやうに見

えて。いさゝかおそろしき海をおそれざる海邊の女のさまけしきもなきわかき女の。あこ

めばかりきたる。侍世に侍ひさいふものひのものゝ若やかなるもろとも

ろといふ物おして。哥をいみしううたひたるいとをかし

うやんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに。風

いたうふき。海のおもてのたゞあれにあしうなるに。物も

おほへず。とまるべき所にこぎつくるほど。舟に波のかけ

たるさまなどは。さはかりなごかりつる海とも見えずか

し。おもへば舟にのりてありく人はかりゆゝしきものこ

そなけれ。よろしきふかさにてだに。さまはかなき物にの

りてこぎゆくべき物にぞあらぬや。ましてそこひもしら

なごかりつる 和の字也。なごかりにゆるや。なりし海上のあらく成しさまこころしきふかさ 大かたる深きにてとこさまはかなき 機林のはかき心。舟の事

ず。ちひろなどもあらんに。物いとつみいれたれば。水ぎは、只一尺はかりだになきに。ゆすどもいさゝかおそろしとも思ひならず。はしりありき。露あらくもせはしづみやせんと思ふに。大なる松の木などの二三尺はかりにてまるなるを五六五尺六寸はうくとなけ入などすることいみしけれ。やかたといふに物ぞおはす。されどおくなるはいさゝかたのものし。はしれたてる物どもこそめくるゝ心ちすれ。はやをつけてのどかにすけたる物のよわけさよ。たえなは何にかはならん。ふとおちいりなんを。それだにいみしうふとくなどもあらず。我のりたるはきよけに。もかうのすきかけ。つまどかうしあけなどして。されどひとしうおもけになどもあらねは。たゞいへのちひさきにてあり。ことふね見やるこそいみしけれ。とほきはまこと似ゝのはぎつくりてうちちらしたるやうにぞいとよく似

やいたといふ物にぞ 簾庫。和名云舟上屋也。釋名云。舟上屋謂之簾庫。言象簾也。之屋。言象簾也。 [増] 簾庫に簾庫。和名布奈夜加太さありはやをつけて 早給也。舟の櫓に付る繩をいふなり 大えなば何にかはならん もし早給されたらば何とせせん。海におち入らんぞん もつうのすきかけ 朝顔透影。イもつうのすきかけ。朝顔のすだれかけたる也。此本可用歟 されどひとしうおもけに 我舟はつの水ぎは一尺ばかりに足りたる 舟とひとしうおもくばあらずと

はし舟

【増】和名抄唐韻云。艇(漢語抄云。艇。乎夫稱。遊艇。波之布福)小舟也。釋名云。一二人所乘也。

【増】今俗にはしけ舟といふ。あまのしらなみは

【増】「世の中を何にたさへん朝ぼらけこきゆく舟の跡のしらなみ」拾遺集にも如此なるに。万葉集には。こきいにし舟の跡なきがこまと有

あまのかづきしたる

和名云。泉郎。漁人。海人。潜女云々。あまの水中に入てすなごりするをがづきといふ。

こしにつきたる物

【増】こしは蟹の腹に網をつけて引あげしこ。此たくなはを海にうけ

【増】「思ひきやひなの別におさるへてあまのなはたきさいりせん」とは。宗祇云。蟹のなはたきはたぐる心。飛鳥井家御説に榜の字。

【増】「碓波江や蟹のたくなはたき作て煙にしめる五月雨の比」後鳥羽院

うしろへたく

【増】弘云。こはうしろめたくと同言。キツカレといふ意。べさめとは往來言にて同義。其例は天皇を。すめらみこと。すべらみこと。さいひ。女郎花を。なみなべし。なみなめし。さいふも皆同。

蟹のあがりてたけいするさま

蟹のあがりてたけいするさま

にたぐり入るさま

たる。とよりたる所にて。舟ごと火ともしたるをかしう

見ゆ。はし舟とつけていみしうちひさきにのりてこぎあ

りく。つどめてなごいどあはれ也。あまのしらなみは誠に

こそきえもてゆけ。よろしき人はのりてありくまじき事

どこそ猶おほゆれ。かち路も又いどおそろし。されどそれ

はいかにもくつちねつきたれはいとたのもしと思ふ

に。あまのかづきしたるはうきわさなり。こしにつきたる

物たえなほいかゞせんとなん。をのこだにせば。さてもあ

りぬべきを。女はおほろけの心ならじ。男はのりてうたな

ごうたひて。此たらなはを海にうけありていとあやふく

うしろへたくはあらぬにや。蟹ものほらんとては其なは

をなんひく。取まごひくりいるよさまぞことわりなるや。

舟のばたをかさへてはなちたるいさなとこそ。まこと

たゞ見る人だにしはたるよに。おとし入てたゞよひあり

はなたるいきなご

二條院の讃岐のうた

「わたつ海の沖つしほあひにがづく蟹の息も

つぎあへず物をこそおもへ」

めもあやに。目もおごらかれて涙まじりこ。

鶴角巻に思ひよらぬ事のめもあやに。鶴流

云。おごらるいふ

右衛門の尉。誰と不知

えせおもたりて

たごひ心たましく。形たはなりさも。骨

肉の腕を海に入る五逆罪の悪人なれば。見

ると見る人にくみ疎む事をしるして後人の

いましめせしにや

七月十五日。ぼんを奉る

孟蘭盆經云。以百味飲食安孟蘭盆中。應

十方自恣僧云々。公事根源云。孟蘭盆は梵

語也。倒懸救器を謂す。倒懸はさかさま

にかくる也。餓飢の苦しみを思ふに。さか

さまにかけられたらんがこし。救器は此

餓飢の苦をすくふうつは物也。傍弟子自盡

始て六道を得て其母の産屋を見るに。餓飢

の中にあししかば。即見尊にまわて。此

○増訂枕草紙春曙抄卷之十二

くをのこは。めもあやにあさよし。更に人の思ひかくべ

いふに

きわきにもあらぬことばをあれ

【増】是より蟹の男に思愛はしるに任官の人の不幸悪道を行くみこしたる白うたり

右衛門のせうなるもの。えせあやをもたりて。人の見る

にかもておせなど見らるしう思ひけるが。いよのくによ

りのほるとて。海におとしいれてけるを。人の心うがりあ

さましがりけるほどに。七月十五日。ぼんを奉るとていそ

らを見給ひて。道命あじやり。

わたつうみにおやをかしてこのぬしのほんする見る

ぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそいとほしけれ

【増】道命の心に感下たる詞

拾遺集などにある事の物がたり

又小野どの、母うへこそば。普門寺といふ所に八講しけ

小野にまかりてさ右

たきこる事は  
上旬はきのふの八講の提婆品拾新設食の  
事。尺尊昔國王にておはせし時求法の御  
志深くて。同私仙人につかへて千年のほど  
断なこり水なくみつゝ終に法華經を得給へ  
る事。下旬は王實が山中に禱りて。仙人  
の基をうつを見て斧の柄の朽たる事。斧  
の心はけふの遊ひの面白きに。をのゝえ柄  
るまでもありたき心。このうた拾遺集に  
は下旬「いさをのゝえは、こゝにたまたま」  
あり。斧に小町を添て云々  
こゝもさばうちきい。此もさば人のうた  
ごも書たれば。聞書やうになりたる事。  
うちきい。さば其頃の哥を集めおくないふ  
由。徹書記物語に見えたり。船垣打聞とい  
ふ書物もあるにや  
樂平が母の宮の 伊豆内親王の御事。古  
今雜上云。なりひらの朝臣母のみ。長岡に  
住侍ける時。樂平宮づかへすきて。時々  
もたまかりさふらはず侍ければ。しはすば  
かりに。母のみこのもさより。さみの事  
て文をもてまうできたり。あけて見れば。  
詞はなくてありける哥「老ぬればさらぬ別  
もありさいへば彌見まくほしき君哉」伊勢  
物語にはさらぬわかれのさあり  
よみにもよむかし  
哥を只前にうちよめば事の外に哥のさまお  
さる物なるべし  
ものなば  
「増」源按。ものをばのなは。よにかふふに  
て物よの意。ばは助辭にていさがるし。  
下文にもあり

るをきよて。又の日小野殿に人々あつまりてあそびしふ  
みつくりけるに。  
遊網母のうた  
たきこる事はきのふにつきにしをけふはきのゝえこ  
くにくたさん  
こよみ給ひけんこそめでたけれ。こよもとばうちきい  
なりぬるなめり  
古今いせものたりなどにある事の物たり  
又業平が母の宮のいよく見まぐとの給へるいみしう  
あはれにをか。引あけて見たりけんこそ思ひやらるれ  
をかしと思ひし哥などを。さうしにかきておきたるに。け  
すのうちうたうたひたるこそ心うけれ。よみにもよむかし  
よろしき男をけす女などのほめて。いみしうなつかしう  
こそおはすれ。なごいへば。やがて思ひおとされぬべし。  
そしらるゝは中くよし。けすにほめらるゝは女だにわ  
ろし。又はむるまゝにいひひそこなひつる物をば  
例の書きたる文跡

ふみの事そうし  
御學文の物がたりにて。いつも夜ふくるが  
こよもふけし  
一二人ついでて 御學問の事か、にもい  
らすれふたくして女房のすべり出でれるこ  
あけ侍ぬ  
清少の夜明しと云云。帝のれふらせ給ふ故。  
もはや大納言殿もれ給へかしと思ひて申す  
なるべし  
今さらにおほさのこもりおはしますよ  
一條院れふらせ給ふを伊周公が被由詞  
云。すでに夜明るに。今迄おきおはしまし  
て今更に御察なるべき事はさ

なまめがわらはの  
長女也。前にあり。それが子などの意

伊周公云  
宿宮中におはする頃伊周まかり給へるにや  
大納言殿まかり給ひて。ふみの事などそうし給ふに。例の  
夜いたうふけぬれば。御前なる人々「二人づつうさて。御  
屏風きちやうのうしろなどにみなかくれふしぬれば。た  
清少はつり御前にある  
よひとりになりてねふたきを念じてさふらふに。うしよ  
つとそうする也。あけ侍ぬなりと獨ごつに。大納言殿今さ  
らにおほさのこもりおはしますよとて。ぬべき物にもお  
ほしたらぬを。うたて何しにさ申つらんと思へども。又人  
の外に誰もさふらはれはまされがたし  
のあらバこそはまされもせめ。うへのおまへのはしらに  
よりかよりてすこしねふらせ給へるを。かれ見奉り給へ。  
今はおけぬるに。かくおほさのこもるべき事かはと申さ  
せ給ふ。けになど宮のおまへにもわらひ申させ給ふもし  
らせ給はぬほどに。なまめがわらはの庭鳥をどらへても  
ちてあす里へいかなといひてかくしおきたりけるが。い  
かゞしけん犬の見付ておひければ。らうのさきにけい  
給ふに  
帝れよ

聲めい玉のねふり  
則詠云。鶴人曉曉聲。三朝玉之照。これ猶如  
鶴の文なれどもうたひ物なれば詩といへる  
にや。鶴人とは猶如の官人。前に丑四つ  
さ奏するさ有。是すなはち鶴人の曉曉心。  
庭の鳥の帝の御職をおどろまし折に。よ  
くかなへる則詠なるべし

又の日はよるのおさむにいらせ 其あくる  
日のよるは。后宮帝の御寮所にいらせ給放。  
清少退出するこ

人よべば 清少退出せんさて従者をよぶこ  
さしぬきのなから  
指貫のすそ半分ほどふみくくされしこ  
たふるな 清少にころぶなこ

ゆうし猶のこりの月に  
則詠の部に。住人雲霧。長靴。これ猶如。  
遊子猶行。二於。月。二雨。谷。鶴。これ其鳥。鶴  
の歌の句也

きて。おそろしうなきのしるに。皆人おきなどしぬや。う  
へもうちおどろかせおはしまして。いかにありつるぞと  
尋させ給ふに。大納言殿の。聲めい玉のねふりをかどろか  
すといふ詩を。たかう打出し給へるめでたうをかしきに  
清少はかりおきぬしゆふこ  
ひどりねふたかりつる目もおほきになりぬ。いみじき折  
るるうえいなればこ  
の事かなど宮も興せさせ給ふ。猶かゝる事こそめでたけ  
れ。又の日はよるのおさむにいらせ給ひぬ。夜中はかりに  
らうに出て人よべば。おるうが。我おくらんどの給へば。  
清少の歌のうた  
あかくて。なほしのいとしろう見ゆるに。さしぬきのなか  
らふみくくまれて。袖をひかへてたふるなといひてゐて  
おはするまゝに。ゆうしなほのこりの月にゆけはとずん  
じ給へる。又いみしうめでたし。かやうの事めでまどふと  
てわらひたまへど。いかでか。猶いとをかしき物をば

僧都の君の御めのとのまゝと 僧都殿の  
乳母の名まゝいひし人さ。こもに。清少  
も御殿の御局に在し。其比乳母の名な  
まゝいひしにや。源氏の蓮生の宮の乳母  
もまゝいひし

「増」或説云まゝとはすべて乳母の通稱なるべ  
し  
かくしげどの  
「訂」万葉抄には。此の六に「まゝこそはまゝこ  
めその」の十字あり

やうなのやうに  
寄居虫。うひさき貝の中にやどりすむ虫也。  
長明方丈記にやうなはちひさき貝をこのむ  
といへる是也。此男家を焼失して人の家を  
かり住むないふ

みまぐさなもやす  
此哥の彼御妹つみたる所よりこいふをうけ  
て也。夜殿を庭野に添ていふ。心は明  
「やすさも草はもえなん春日野を只春の日  
にまかせたらなん」是らのうたの心よりよ  
めるにや  
わらひのしり 乳母のまゝにや

道隆公の御むすめ一後院の御くしげとのこ

僧都の君の御めのとのまゝと。みくしげどの、みつほね

にゐたれば。さのこある板じきのもどちかくよりきて。か

らい目を見さふらひつる。誰にかはうれへ申さふらばん

とてなんとなきぬほかりのけしきにていふ。何事ぞとこ

へば。あからさまに物へまかりたりしまに。きたなく侍る

所のやけ侍りにしかば。日ころはがうなのやうに人の家

にまりをさしいれてなんさふらぶ。うまづかさのみまぐ

さつみて侍ける家よりなん出ようで来て侍る也。只垣を

出火の所に此男の家をかりしこ。夜殿にこれころを云

へだて侍れば。よどのにねて侍けるわらははもほと

くやけ侍ぬべくなん。いさかものもどうで侍らずな

ごいひをる。みくしげどのも聞給ていみしうわらひ給ふ。

みまぐさをもやすばかりの春のひによどのさへなどの

こらざるらん

どかきて是をとらせ給へとてなげやれば。わらひのし

このおはする人の家のやけたりさて  
こいにおはする女房の其方の家やきたり  
冥みて是をさらせらるゝと  
かためもあきつかうまつりては  
此男無難なる事をいふ。片目もあては  
いかでかまみ待らん

里にいきていかにはらた  
彼男里に歸り行きて人に見せ聞ていかには  
らだん  
なごかく物ぐるほしからん  
いっでやうに物狂はしくわらふらん  
笑ふをわらはせ給ふ  
いみしくおもへども  
男のみさを親への孝など随分と思へども  
内にもいれられず  
外にはなち出されてうかくもいれられぬ  
之。桐壺巻に。をさなにな成給ひてのらは  
ありしやうに御殿の内にもいれ給はず  
る類なるべし  
まらうさにもいさなかし  
客人をもよくあしらふ。こ。いまらうさも  
こは客をあへしらす所。此本し。る。

りて。此おはする人の。家のやけたりとていとほしがりて  
給めるとてとらせられは。何の御九んじやくにか侍らん。  
合力の物何ほごにて侍らん  
物いくらはかりにかといへば。まづよめかしといふ。いか  
でか。かためもあきつかうまつらではといへば。人にも見  
せよ。只いせのせは。とみにてうへへまあるぞ。さはハ  
めでたき物をえては。何をか思ふとて皆わらひまごひて  
のほりぬれば。人に見せつらん。里にいきて。いかにば  
らだんなど。御前にまゐりてまゝのけいすれば。又わら  
ひさわら。御前にも。などかくものるはしからんとわら  
はせ給ふ  
男はめ。おやひとり有いみしくおもへど  
も。わづらはしき北の方の出来てのちは。内にも入られず。  
さうぞくなどの事はめのこと。又こうへの人どもなごして  
せさす。西東のたいのほごにむらうとにむいどをかかしう。

上達部の又なきに  
此男のいもうと。ある上達部の懸々なるに  
かしづかれて北方なりし  
定澄僧都に  
此調前の詞に連続せず。従も通下がたし落  
丁などあるにや。諸本かくのごとし。追て  
可い助。先前は別段ならん  
訂弘按。此定澄云々一段は。イ本に上の四  
段のこを。さくなるものと云段の末に入  
り。是をよしとすべし。然れども又なほ誤字  
もあるにやと思へば今本のまにさし置つ  
まごこにや下野にくたるといひける。清少  
下野國へ下るといふ説あるは誠か。傳人に  
置遣す。こ。イ高野とあるは。おきあやまりに  
や。イまごこややがて下る云々  
訂弘按。此一段も誤あるべし。萬葉抄には。  
下のおふさかばの歌の次に。まごこや云々  
と此一段を添へたり。然して下野にの三字  
なくてやがてはの四字あり  
おもひだにかいらぬ。此清少の哥。上句は下野へ下る事思ひもかけぬの儀。下句は誰いひてさやうには告たるぞと。里はを。左とほごそ  
へたり。清少納言集に「こ。ながらほごふるだにもある物をい。こはほごのさなきせとよめる詞とおな。ましも草は灸治に用ふる故火

屏風さうごのゑも見所ありてすまひたり。殿上のまじら  
ひのほご口をしからず人々もおもひたり。うへにも御け  
しきよくて。つねにめしつ。御あそびなどのかたきには  
おほしめしたるに。猶つねに物なけかしう。世の中心にあ  
はぬこちにして。すきくしき心ぞかたはなるまである  
べき。上達部の又なきにてもてかしづかれたるいもうとひ  
どりあるはかりにぞ。思ふ事をもうちかたらひなごさめ  
所なりける  
定澄僧都にうちきなし。すいせひ君にあこめなしといひ  
けん人もこそをかしけれ  
まごこや下野にくだるといひける人に。  
おもひだにかいらぬ山のさせも草たれかいとてのうと  
はつげしぞ



にそへて。思ひだにかいらぬといへり。伊吹は美濃近江の界なるにはあらず。下野國なりき能因が坤元儀に出たるよし袖中抄に見ゆ。此哥も誰かいふといひかけて。下野の伊吹の里さしも草ある所なれば。よせてよめるにや。かくさだにえやはいふきのましも草同秀句と

おなご宮人をかたらふ  
彼女房さおなご養後宮などの宮仕への女房に。遠江守の子が二心なりしと親などもかけて

是よりかある女房の友達にたたる間。彼男の二心を恨ければ。さる事なしとあらひひて。父の遠江守をも警言にいれたりしと

いかにいふべきさいふを聞て  
かやうに男はあちがふないか。いかにいふと彼女房の云ふ

ちかへきみとほつあふみの 清少の女房に。かはりてよめる哥也。上句は親をかくて替ける事をうけて。遠江守を神にそへてよめり。下句は夢にだに見すといひしをうけて。無下に一向端つがたを見ざりしが。神かけてちかへきと。遠江の各所なれば。端さいひかけてよめり。神かけても橋の縁語也。

びんなき所にて さあるまどき所にて人に  
むれのいみしうはしり  
なごこの胸さわぎし。古今一人にあはんつきのなきよは思ひおきてむねはしり火に心やけなり

あふさかはむねのみ 逢坂を逢にそへて。走井の水を見付るといひ懸たり。逢時は見付る人やあらんさ常に胸さわぎと

女のうはきは  
【訂】原本には此段なし。然して原本は此邊誤り多きやうなれば。今悉く万葉抄によりて改めつ

うすいろ 薄紅なり。又たて。ぬき白きなもす色といへり  
からぎぬは 唐衣也。女官装束の時上に着るもの  
あかいろ 胡曹抄に云。赤色種と書いて論る也。又赤色たて紫。ぬき赤とあるは織物なるべし

もは  
【増】装束。女官装束の時着用するもの  
おほうみ 源氏玉かづらに。海賦のおり物とあり。大海に海松貝也。此類の装束なるべし  
しびら 夕顔巻に。しびらだつ物か。こま斗ひきかけとあり。うは装束の事と云々。装束さて装束の「やう」を見たり

かざみ 汗衫。童女の装束之前ニ註  
夏は青くちば 桃華の御歌。表背丹の黒みあり。裏は青

もえぎにかしはおりたる  
萌木に柏葉をうは紋にかりつけたる也  
見さめこよなし こよなく見さめする也

あふひ 葵也  
かたばみ 群衆。和名にあり。イハ下下にあられちとあり  
【訂】萬葉抄にも。かたばみの次に「あられちとあり」

かたつたのゆだけきたる

ある女房の遠江守の子なる人をかたらひてあるが。おなご宮人をかたらふとさきよて恨みければ。親などもかけて

ちかばせ給ふ。いみしきそらごと也。夢にだに見すとなんいふ。いかにいふべきとさきよて

ちかへきみとほつあふみのかみかけてむねにはまなのばし見ざりきや

びんなき所にて人に物をいひけるに。むねのいみしうはしりける。なごかくはあるといひけるいらへに。

あふさかはむねのみつねにはしりるのみつくる人やあらんどおもへは

女のうはきは  
前二註  
うす色。えびぞめ。もえぎ。さくら。紅梅。すべてうすいろ

のたぐひ  
からぎぬは  
あかいろ。ふぢ。夏はふたある。秋はかれ野  
もは  
おほうみ。しびら  
かざみは  
春はつらじ。櫻。夏は青くちば。朽葉  
おりものは  
紫。しろき。もえぎにかしはおりたる。こうはいもよけれど。猶見さめこよなし  
もんはイあものもんは  
あふひ。かたばみ  
夏うすもの。かたつたのゆだけきたるひとこそにくけ

百四十九段

百五十段

百五十一段

百五十二段

百五十三段

百五十四段

此以下の文章、心得がたし。若し中古此時代に變の衣服などに片方の行長ゆたかにた

「訂」万歳抄此所の「夏うすものかつたつたの

「増」ゆきの長きをいふ。万歳抄云。脱たれ

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

「訂」正にて。職員云云。彈正朝臣

百五十五段

のけさばり有て物のけさはなし

事ならばにさふ  
何の事なげに問ふ。古今「村島の立にし我

れど。あまたかさねきたればひかれてきにくし。わたなど

あつきはむねなどもきれていと見ゆるし。まぎてきるべ

き物にあらず。猶むかしよりさまよくきたることよけれ。

左右のゆだけなるはよし。それも猶女はうのさうぞくに

てはどころせかめり。をこのあまたかさぬるも。かた

つかたおもくぞあらんかし。きよらなるさうぞくのお

り物。うすものなど。いまはみなごころあり。いまやう

に又さまよき人のきたまはんいとびんなき物ぞかし。か

たちよき君達の彈正にておはするいと見ゆるし。宮の中

將などの口をしかりしかな」

やまひは  
和名脚氣名脚痛

あいきやうづきよしと見ゆるが。はまいみしくやままど

ひて。ひたひがみもまどになきぬらし。かみのみだれか

するもしらず。おもてあかくておさへるたるこそをか

けれ」

八月はかりしろきひとへ。なよらかなるはかまよきほど

にて。しきんのきぬのいとあきやかなるを引かけて。むね

いみしうやめは。友だちの女房たちなどかはるくきつ

く。いとほしきわきかな。例もかくやなやみ給ふなど

事なしびにとふ人もあり。心かけたる人はまこといみ

しとおもひなき。人しれぬ中などは。まして人め思ひて

よるにもちかくもえよらずおもひなききたるこそをか

けれ」

あまた見きて

見えたりし  
經きなどするもかくれなきに 證經の僧  
の座は物へだて、聽聞すれども。女中  
は隠れなくしるれば。僧の目をやるさま

心づきなきもの  
「増」俗にキニクハヌトヤヤなどいふに同じ。  
思ひやりのなき意。中巻の六卷五十九段  
にあれど誤ると既にいへり

「訂」万葉抄には此段なし。弘按。万の編者は。  
説に上に(六の卷に)心づきなきもの、一段  
ある故に除きしなるべけれど。なかくに  
誤。却て此所にあるをよとす。此こそ  
は上に遺按に委しくいへるが如し

我をばおぼさす何がしこそたゞいまの人  
つかふ者の陰背に。我を主君のおもひ給は  
で其人こそ出頭なれなさいふなき付し心

おしはかりこそうちし  
女を二心ありなご其男のおしはかり恨る  
我がしげなる  
女にあらばせめやうにかしこげに物いふ  
かゝる人にもおぼゆる

かく心あしきめのさにもやしなはれたる  
子よとおぼゆるゆゑにや其子の心づきなき  
さふくめる間  
あまたあるが中に。此御子を觀たちのおも  
ひおとしてにくみ給ふと。はらあしくめの  
さのいふさま

にもきこしめして。御どきやうの僧の聲よき給はせられ  
は。どふらひ人どもあまた見きて。經ききなどするもか  
くれなきに。めをくほりつゝよみるたるこそつみやうら  
んとおほゆれ

心づきなきもの

物へゆき寺へもまうづる日の雨。つかふ人の我をばおほ  
さず。何がしこそたゞ今の人などいふをほのきゝたる。人  
よりは猶すこしにくしどおふ人の。おしはかり事うち、  
し。すゞるなる物うらみし。我かしこげなる。心あしきひ  
どのやしなひたる子。さるはそれがつみにもあらねど。か  
ゝる人にもとおほゆるゆゑにやあらん。あまたあるが  
中に。此きみをは思ひおとし給ひてや。にくまれ給ふよな  
どあらゝかにいふ。ちこは思ひもしらぬにやあらん。もど  
めてなきまごふ心づきなきなまり。かとなになりても思

おとなになりても

其子成人のうちに心懸きめのさの後見がら  
に親子の中も中々心付なくなる心  
はしたなくいへどそひつきてれんころがる  
いひよるをいさひてすげなくいひはなでこ  
も猶うひよりて懸念なるさまを見するが心  
づきなきと

思はん人のまづなご心ざしありていはんを  
我思ふ人の志にこれかくへなごいふを。  
なみがたくてくふにこそそなり。是より其  
物くふ故をおしはかりて。くはする人もに  
くき故をいふなり

くひなるにこそ。さればくはする人もにく  
きと

心もなかりけりて。こすはさてなん。濁つ  
けたに出さぬて見かぎりに来てはさてあ  
りなん。其分よと。物くふもくはするも  
にくきをいはんて

里にて北おもてより  
宮づかへ所ならで。里亭などの北の藥所な  
ごより出でて物くはせんは各別の事と

ひうしろみもてさわらほごに。中々なる事こそおほか  
めれ。わびしくにくき人におもふ人の。はしたなくいへど。  
をひつきてねんころがる。いさゝか心あしきといへば。つ  
ねよりもちかくふして。物くはせいとほしがり。其事とな  
く思ひたるに。まつはれついでうし。とりもち。まごふ。み  
やづかへ人のもとにききなどする男の。そこにて物くふて  
そいとわろけれくはする人もいとにくし。思はん人のさ  
づなど心ざしありていはんを。いみたるやうに口をふたぎ  
てかほをもてのくべきにもあらねば。くひをるにこそあ  
らめ。いみしうゑひあごして。わりなく夜ふけてとまりた  
りとも。さらけゆづけたにくはせじ。心もなかりけりて  
こすはさてなん。里にて北おもてよりし出してはいかゞ  
せん。それだに猶ぞある。はつせにまうで。つはねねたる  
に。あやしきけすごもの。うしろさしませつゝ居なみたる

くればしをのぼりこす  
隣階。長谷にあり。前にも出たり。登園の  
ぼりつかれたる心  
【増】上の六巻の末にも初瀬詣の條ありてそこ  
にもくればしを昇降するにおそろしきこと  
あり。見合すべし。上には此所よりも委し  
くあり

よろしき人はせいしわづらひぬかし  
やごまなきをいふまでにはあらぬ清少ほど  
の人はかの下すども前に有せても制しが  
たしと  
そこまもすこし  
足下也。其方遠少しのけさ宿坊のいふほど  
こそまばしほのけと

ついでに  
次第をたがへすとの心

けしきこそなまがしろなれ。いみじき心をおこしてせう  
でたるに。川の音などのおそろしきに。くればしをのぼり  
こうじていつしか佛の御かほををがみ奉らんとつはねに  
いそぎ入たるに。みの虫のやうなるもの。あやしききね  
きたるか。いとにくきたちるぬかづきたるは。おしたふし  
つべきことちこそすれ。いとやんごとなき人のつはねは  
かりこそまへばらひあれ。よろしき人はせいしわづらひ  
ぬかし。たのもし人の師をよびていはすれば。そこどもす  
こしされなごいふほどにこそあれ。あゆみ出ぬればおな  
にやうになりぬ  
いひにくきもの  
人のせうそこ仰せ事などのおほかるを。ついでにまへに  
はぢめよりおくまでいといひにくし。返事又申にくし。  
はづかしき人の物おこせたるかへりこと。おとなになり

思はずなる事聞付  
成長の子のよからぬすき事するを聞つけて  
まへにては 直前に親の異見をいひに  
くしと  
四位五位は冬六位は夏 四位は黒。五位は  
緋の袍。冬に相應なること。六位は縁彩夏  
に似合しきこと  
そのあすがたなども  
禁中に直宿する程の衣服も。男女につけて  
其品々こそ吟味あらまほしけれと  
家のきみにてあるにも  
一家の主にも其品々の衣服の吟味ありた  
きな。誰かばさまで吟味し定るぞと  
それたに物見知たる  
一家の内にてだに。其衣服の品の吟味なき  
は他所の使者などの物見知たるは。さうく  
批判し沙汰すべきこと  
ましてまづらひする人は  
一家の内にてだにあるに。ましておほやけ  
のまづらひする人の衣服の吟味なきは。こま  
なく口をしと  
れこのつちにおりたるやうにて  
此詞衍文なるべし。或本に此詞の下に前に  
たのもしき物さいふ所にある一人のつはねに  
さりわきてよしと見ゆる所はさいふより。  
まもらるゝこそ他しけれ。さいふまで六七  
行かけり。亦衍文なるべし  
【増】弘按。こはいさをかきなごいふ詞を省け  
る。意は猫の地におりたるは甚品なくて  
見すばらしきものなれど。四位五位の人に  
ても。衣服の粗なるは品格なくて。猫の地

たる子の思はずなる事きまつけたる。まへにてはいとい  
ひにくし  
是亦別段  
四位五位は冬。六位は夏。どのあすがたなども。しなこそ  
男も女もあらまほしき事なめれ。家の君にてあるにも。誰  
かはよしあしをさだむる。それだに物見知たる使ひ人ゆ  
きて。おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人は  
いとこよなし。ねこのつちにありたるやうにて。たくみの  
物くふこそいとあやしけれ。新殿をたて。東のたいたち  
たる屋をつくること。たくみどもあるなみて物くふを。東お  
もてに出あて見れば。まづもてくるやおうきと。しる物ど  
りてみなのみて。かはらけはついでつぎにあらはせ  
ふもの。うつは物がたりにもしもの御あはせあり。膳の飯はくはぬかと思へばやがて音くひて  
をみなくひつれば。おものはふようなめりど見るほどに。  
やがてこそうせにしか。二三人ありしものみなさせしか  
は。たくみのさるなめりと思ふや。あなもたいなこと  
○増訂枕草紙春曙抄卷之十二  
四百十三

におりたるが如くをかしとさるべし

もや

物がたりをせよ。むかし物がたりもせよ。其いたりきする人ならぬ人のつたはらよりまきはすさかしらにいらへうちして。こと人どものいひまぎらばす人いとにくし

中の君さや

大君中君三君の類か。あれと三女さの中の心。イ何の君は名のしれぬゆゑにいふなるべし

君達にはあられど君達には攝家などの御子息をいふこ。まやうの歴々の御子なられど

猶ゆきやらぬさま

名残を思ふ故。猶行やらぬ心はへをも女にいひしらせん男の思ふにさ

有明の月のありつゝ

拾遺戀三「具月の有明の月の有つゝも君しきまさは我戀めやも」かしらにもよりこす五寸ばかりさかりてさかりては遊之。所をさりたる心。月影の女のかしらのあたりまではさしいらで。五寸ばかりこなたまでさしたるさま也。イ本

ある所に中の君とかやいひける人のもとに。君達にはあらねども。其心いたくすきたるものいはいはれ。心ほせなどある人の。九月はかりにいきて。有明の月のいみしうてりておもしろきに。名残おもひ出られんことのはををつくしていへるに。今はいぬらんと遠く見おくるほどに。えもいはずえんなるほど也。出るやうに見せてたちかへり。たてしどみあいたる陰のかたにそひ立て。猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに。有明の月のありつゝもどうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりさがりて。火ともしたるやうなる月のひかり。も

てあかきおもふにもよほされてその心よほされて。おどろかきさるゝ心ちしければ。やさらたちいでにけりどこそかたりしか」其男清少にかたるにや是より又車などす人の心はへをいましてけり。女房のまゐりまかでするには。車をかるをりもあるに。心よそひしたるかほはうちいひてかしたるに。うしかひわらばの例のうしよりもしもまにうちいひて。いたうはるこ不請けなるさま。牛をにくみふこ。牛を打て車をぬむしりうつも。あなうたてとおほゆかし。そのこどもなどの物むつかしけなるけしきにて。いかでよふけぬさきにおひてかへりなんといふは。なほ主の心おしはかられて。と

さしのぞきたるかしこより。五寸ばかりをさして。火ともしたるやうなるさま也。尤可

用か

まわりまかてする

参上し退出する

心よそひたるかほに

かりに給はらんぞ用意せし心よげにいひ

て車をかしおこせし

例のうしよりも下さまに

牛をいたくいひ

くたしにくめるさま

をのこどもなどの

かりたる車の車副の男

猶主の心おしはかられ

猶の字心をつくべし。心よそひたるなど心

よげにいひおこせたれども猶不請なりし

ならんぞ其主の心しられたり

さみの事なりと又いひふれんともおぼえず

急用にも又さ車かる事いはんと思はずと

なりさほのあそん

氏姓不<sub>レ</sub>知。但高階業道にや。業緒より七代

の孫。敏忠の子

ならばせたりしが

「訂」こは説と註にありてかなの意のつと

いへれど。上にぞの指辭ありては語格とい

のひ難し。按するにその上にこの字の落た

るなるべし

我が従者してうたせ

業道の従者にいひつけて。彼の女車の牛を

打追せて引あげさせたるこ。心よそ人な

こまなしびにまかせてなごはあらず  
何のいふべき事もなきにまかせてさつこ  
くにはあらで。心とめてかくこ

しろきひさへのいたくしほみたるを。心に  
物をおもひつゝ花なごうちまもるさま  
[増]源接。女のもより衣をかりて来たりし  
なへすならん。

久しながめて  
物をおもひりたるさまなり

經のさるべき所々。こゝもその文跡すべて  
奇妙

見えたり」  
好宮にて本妻をさだめぬ男の物がたり  
すきくしくして獨ずみする人の。よるはいづらにありつ  
らん。曉にかへりて。やがておきたる。まだねふたけなる  
けしきなれど。すゞりどりよせすみこまやかにかしすり  
て。ことなしびにまかせてなごはあらず。心とめてかく  
うちひろりつくるはぬ  
まひろけすがたをかしう見ゆ。まろききぬごものうへに  
山吹くれなるなどをぞきたる。まろきひさへのいたくし  
ほみたるをうちまもりつゝかきたて。前なる人にもど  
らせず。わざとだちてこどねりわらはのつきづきまきを  
身ちかくよびよせて。うちさよめきていぬるのちも久し  
くながめて。經のさるべき所々など志のびやかに口すさ  
びにまらたり。おくのかたに御てうづかゆなどしてそよ  
きこしめせなご云々  
のかせは。あゆみ入て。ふづくるにおしかりて文をぞみ  
る。おもしろかりける所々はうちずんしたるもいとをか

なほしばかりちきて  
直衣には下にきぬをかきぬる。きぬをか  
されざるを直衣ばかりさいふにや。一説指  
貫を略して直衣ばかりきたる。源氏帯  
木にて初の既を用ふ  
けしきばめば。使の小舎人かへりたるさま  
を口にはいひもやらでこぼくりなごして  
其けしきを見る

なほしもうへのきぬもかりきぬも。直衣に  
ても袍にても狩衣にても心。かされて  
替るにはあらず

目をそらにて  
供の男たて文をとりもちて。馬上の主に捧  
るさま。主を見るこて目を空にする  
いさにくげならぬが  
[訂]万葉抄には「いさきよげなるが」とあり。  
然れども本のまゝにて聞ゆべし

せんトゆだらに。前に註す。こゝは靈氣の  
断によむと見ゆ。則千手陀羅尼經の中に若  
家内に大惡刹にあひ。百怪駭ひ起り。鬼神  
都覓其家を騒亂するにも。千眼大慈の像の  
前に其壇を設けて。至心に觀世音菩薩を念  
ふ此陀羅尼を誦して。其千道に滿たば惡事  
悉消滅せんあり

し。手あらひてなほしはかりうちきて。ろくをぞそらによ  
む。まこといじたふときほごね。ちかき所なるべし。あ  
りつる使うちけしきはめば。ふとよみさして。返事に心入  
るこそいとほしけれ」  
是より又別  
きよげなるわかき人の。なほしもうへのきぬもかりきぬ  
もいとよくて。きぬがちに袖うちあつく見えたるが。馬に  
のりていくまゝに。ともなるをのこたて文を目をそらに  
てとりたるををかしけれ」  
是より別  
前の木だちたかう庭ひろき家の。東南のかうしどもあけ  
わたしたれば。涼しけにすきて見ゆるに。もやに四尺の几  
帳立て前にわらうだをおきて三十餘はかりの僧のいと  
にくげならぬが。うすずみの衣。うす物のけさなどいとあ  
さやかけうちさうそきて。かうぞめの扇うちつかひ。せん  
じゆだらによみるたり。ものよけにいたうなやむ人にや。

ほそくにほやかなるこ  
細くつやめきたる獨結をよりましにもたせ  
て  
なを目うちひさきて  
かいは聲をいらげたるさま。目うちひ  
さきは目うちひつさきて之。尻目にならみ  
見らさま。決い皆々詩にも作れり  
「訂」万歳抄に目をふさきてこそあり。ひさふ  
さ相通すればさもありぬべし  
又一本には此句なくてうちをひみてさあり  
おこなふまいにしたがひ給へる護法も  
彼僧の加持しなふにしたがひて佛験を  
見せ給へる心。護法は加持の験をいふこ  
前にも有。イニおこなふにしたがひて調せ  
らる。佛の御心はへを見るにもいさたふさ  
し云々  
「訂」万歳抄。又一本には護法もげにの四字な  
くて「ほさけの御心もいささあり  
例の心ならばいかにづかしとまどはん  
よりましの童女現心ならば人々あつまりし  
中にては。此ありさまはまどはんごんご  
みづからはくるしからぬ事さしりながら  
加持によりましの調せられ苦しむは。靈の  
苦むにて其よりましの童女のみづからの上  
ならずさは知りなむらさ

よりまし  
うつすべき人としてかほきやかなるわらばの。かみなどう  
るはしき。すゞしのひとへあきやかなるはかまながくき  
なしてゐさり出で。よこさまにたてたる三尺の几帳のま  
へにゐたれば。とさまにひねりむきて。いとほそくにほや  
かなるとこそとらせて。をよと目うちひさきてよむたら  
にもいとたふとし。けそくの女房あまたゐて。つごひまも  
らへたり。久まくもあらでふるひ出ぬれば。もとの心う  
よりまし  
しなひて。おこなふまゝにまたがひ給へる護法もけれた  
ふとし。せうどのうちききたる。ほそ冠者ともなごのうし  
ろにゐて。うちはずるも有。みなたふとがりてあつまりた  
るも例の心ならばいかにづかしとまどはん。みづから  
はくるしからぬ事とまりながら。いみしうわびなけきた  
るさまの心なるしさを。つゝ人のしり人などばらうた  
おほえて。几ちやうのもどちかくゐて。きぬひきつくるひ

わがき人々は心もな  
心はいへど心もなさに。急ぎて見  
るさま。時々なごの若き女房  
きちやうのうちにごんご  
朝内と思ひしにかやうに人々の中を渡まし  
く思  
かみをふりかけて  
おもてをばちて。ひたひ髪にてまほひく  
したるこ  
かぢすこして  
加持。加は佛の三密也。持は行者の三業後  
三密を此三業に持たるを云  
時のほごにもなり侍ぬべければ  
例時のおこなひすべきほごになりしこ  
ほうちばふたう 未考茶飯などをいへる調  
にや  
「訂」一本には。此の「ほうちばうたうまら  
せん」の十二字なし。なきをよしとすべし  
「増」岩崎美隆云。ほうちばはそちの誤か。然  
らば岩瓜也。谷川士清云。はふたうの小豆  
を以て饅頭を煮るものこさいへり。備經亮  
云。ばうそうとは今の雑餅のとこ。奈難

イサウ  
なごするほごに。よろしとて御ゆなど北おもてにとりつ  
ふほごをも。わかき人々は心もな。はんも引さけなが  
らいそいでくるや。ひとへなごきよけに。うすいろのもな  
ごなへかよりてはあらずいとさよけ也。さるの時ほごい  
みしうことわりいばせなごしてゆるしつ。まぢやうのう  
ちにとこそ思ひつれ。あさましうもいでにける哉。いかな  
本心うしなひつるほごに。いさありけんご  
る事有つらんとはづかしがりて。かみをふりかけてすべ  
り入ぬれば。まはしとめて。かぢすこして。いかにさは  
やかに成り給へりやとてうちをみるも恥かしけや。ま  
はしごふらふべき。時のほごにもなり侍ぬべければと  
まかり申で出るを。まはし「ほうちばうたうまらせん」な  
ごごむるを。いみしういそけは。所につけたる上らふと  
おほしき人。すのものとにらさり出で。いとうれしくたちよ  
らせ給へりつるさるしに。いとたへがたく思給へられつ

さけり。美接よ。尺素往來よ。佛徳頭  
露髓などあるボウタウ(露髓)のこれ  
いさまのひま つかれこぼなり。めづ  
なるにや。伊勢物語に。まめに實業にて  
ある類  
たゆませ給はざらんなんよく侍べき  
油斷した給はぬが可然からんぞ

佛のあらはれたまへるこそおほゆゆ  
「訂」イ本には是より次の「きよげなるわらは  
の」さあるへつげたり  
ひげおひたれどおもはずにみうるはしき  
舞はありながら。思ひの外に舞うつくしき  
こ  
いさなげにて 僧のいさなまうに時に用  
られしさま  
こいさしにやんこさなきおほえある  
陰者にても學匠にても方々に出頭  
法師もあらまほしき  
法師は聖さいひながら時にあふはよしと  
「訂」この詞「あらまほしきわざなれ」を  
イ本には「あらまほしげなるわざなれ」とあ  
り。いづれにても同意

きぬのせぬ  
雷かみ  
のけくびしたる人  
のけえりに着たる人

るを。只いさまおこたるやうに侍れば。返すくよるこびき  
こえさする。あすも御いとまのひまには物せさせ給へな  
どいひつゝ。いとまうねき御ものへけに侍めるをたゆま  
せ給はざらむなんよく侍べき。よろしく物せさせ給ふを  
るをなん悦び申侍ると。詞づくなにて出るは。いとたふと  
きに。佛のあらはれたまへるとこそおほゆゆ  
是より別段 僧家の使ひ人小童子のさま  
きよげなるわらはのかみながき。またおほきやのなるが  
ひげおひたれど。おもはずにかみうるはしき。又したるか  
にむくつけなる男なるべし。肉衆おほき  
こにやんこさなきおほえあるこそ。法師もあらまほしき  
わざなれ。おやなどいかにうれしからんことをおしは  
からるれ  
見らるしきもの  
きぬのせぬひかたよせてきたる人。又のけくびきたる人。

れいならぬ人のまへに  
類ふ人を見まふもの、をまなき子をつれゆ  
きし。病人のほほりに幼童は遠慮なく  
さむがしき事あればなるべし  
「増」源云。尋常よりすぐれたる貴き人のまへ  
りに小兒をつれ出るなるべし  
法師は陰陽師のかみかうふりしてはらへした  
る  
法師ながら陰陽師にて教などする物。道  
満法師など其類なるべし。宇治拾遺六。内  
記上人寂心。播磨の國にて。法師陰陽師の  
紙冠を着て被するを。何しに紙冠をきしぞ  
と問はれければ。被戸の神達法師を忌給  
へば被の程暫く着て侍るさいふに。上人紙  
冠を取て引破りて佛弟子成ながら。被戸  
の神達にくみ給ふことも。如来の忌玉ふ事  
を破りてまばしも無間地獄の業をはする事  
よしなしと制したる事あり  
かたみに見かはしたらん  
畫れせしどちたがひにれはれはほの見くる  
しがるべければなり  
色くろき人の イニふくいさくろき男の白  
はりきたるさあり。ふくいさはふつくりと  
こ。源氏夕顔巻にもある詞  
ほうのまほりたれば 生潮のひさへは。晴  
のすきまほりてよく見ゆるゆゑ。のしひと  
へより見ゆるしきにやま前を立かへりこ  
わる詞  
物くらうなりて云々  
「増」源云。是より以下取文なるべし

下すだれきたなけなる上達部の御くるま。れいならぬ人  
のまへに子をみていきたる。はかまきたるわらはのあし  
だばきたる。それはいさやうのもの也。つばさうぞくきた  
る物のいそぎてあゆみたる。法師。陰陽師のかみかうふり  
まてはらへしたる。又色くろうやせにくけなる女のかつ  
らきたる。ひげがちにやせくくなる男とひるねしたる。何  
見にくき男のひらには見るかひなきまをいふ  
の見るかひにふしたるにあらん。よるなごひかたちも  
見え。又おしなべてさる事となりたれば。我にくけな  
りどておきあるべきにもあらずかし。つどめてとくおき  
いぬるめやすし。夏ひるねしておきたる。いとよき人こそ  
今すこしをかきしけれ。えせかたちばつやめきねはれて。よ  
うせすはほうゆがみもまつべし。かたみに見かしたら  
んほどのいけるかひなごよ。色くろき人のすしひとへ  
きたるいと見らるしかし。のしひとへもおなじくすきた



筆もつかひはて、是をかき。筆もつかひはて早く此草紙を書けてんぞ

人やは見んずると思ひて

人の見るべき物ならばこそ遠慮もせめ。人やは見んと思へば里に居て徒然の慰みに書しとぞ

きようかくし、すきさいききよく隠密せしに思ひの外に世にもれしとぞ

「訂」万歳抄。此の「きようかくし」たりと思ふを「の下」に「左中将経房朝臣の見付てしひてさりあげ給へれば」の廿一字あり

なみだせきあへず、そ「枕より又しる人もなき戀をなみだせきあへずもししつる哉」古今

宮の御まへに云々

「増」弘云。是より此草紙をかきしわけないへるなれば。此の句の上にサテ此草紙ナカキマツケの云一句を添て解すべし。然らばよく心得らるべし

内のおさの奉り給へり

史記といふ文。前漢の司馬遷。三皇五帝より漢武帝までの事を書しと

さはえよとて給はせ

さあらば清少にえさするぞ。后宮の御詞を給えり出て哥などをも

今此さうしに書出たる外に。猶もよく撰て哥なども何をも書て。物めかしくもつくりたればこそぞ

念ふほどよりはわろし心見えなり。物めかしく書たらばかへりて清少の書し物なれば

こゝろ、くしと思ひしに。思ひし程にはなくとぞ。清少の心のたけ見えたりなとぞ。あざけられぬとぞ

人なみく、なるべき耳をもきくべき物かは世の騒び物の中にいれられて。人なみく物さいふほどの事を聞べき物かは思ひくたしたればその心。耳をきくとは目を見るさといふやうに。人なみく、なるべき物かは書ける所清少の筆頭の玄妙なるべし

いさあやしくぞあるや。かくおもひくたしたる草紙を見る人ハはづかしなといへば。あやしく心得がたきとぞ。やハ助字

げにそれもこそわり。彼耻かしといふ人に對して尤その心。いかにさなれば清少のやうに世にひがみて。其好悪人にたがへる物ハ。其心中のよこしまなる事おしはかられて物むつかしき物なれば。かへりて恥かしといへるも道理ぞとぞ

たゞ人に見えけんぞねたきや。かやうに我が心中までおしはかられさまんく沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひるまりたるがれたきとぞ。或本に此なほりの詞の跡に「左中将またいせののみさきこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたみさし出し物は。このさうしりて出にけり。まごひさりいれしや。やがておはして。いさ久しく有てぞかへりたりし。それよりありきめたる也とぞあり。又奥書に云。源経房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢朝臣の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。昔加秋云々。此本ニ左中将といへるは。此経房の事也。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる巻にのりて。此草紙の出たるな。さりいれかくさんせしや。終に経房の取ておはして久しくさめてうつし給へるにや。それより此草紙世にひろまりありきたるさ。さし出し物にさいへる物ハは助詞也。此草紙にもあり。源氏物語にもある詞也。さて此奥書に。経房の伊勢守なりしは。長徳の事なるに。其後の長保の比の事など。此草紙にあるは。後に書くはへたるかとの態なるべし。發端にもいひしやうに。后宮かくれさせ給ひてのち。清少おさるへての世に。昔思しき心なのべて書加られし事ありと見えたり。此ゆゑに此草紙に詳畧の異本様々ありとせしるべし。

下 卷 終

れど。紅なれば色無きがすきてもまきろ、故。句。ほうのとほりたればにや

あらん

是より此草紙書し事なへり。夕暮などになりしさまなるべし。物くらうなりて文字もかゝれずなりたり。筆もつかひはてし是をかきはてはや。此さうしは目に見え心におもふ

事を。人やは見んずると思ひて。つれづれなるさとのほどにかきあつめたるを。あいなく人のためびんなきいひ

すらしなどまづべき所々もあれば。きようかくしたりと

におもふを。なみだせきあへずこそなりけれ。宮の御まへの由來をいふ

に内のおさの奉り給へりけるを。これに何をかゝまし。

上のお前には史記といふ文をかゝせ給へるなどのたまはせしを。枕にこそはま侍らめと申しかは。さはえよとて給

はせたりしを。あやしきを。こよやなれやと。つさせずおは

かる紙のかずをかきつくさんとせしに。いと物おほえぬ

事ぞおはかるや。大かた是は世の中にかしき事を。人の

めであしなど思ふべき事。猶えり出て哥なども木草鳥虫をもいひ出したらばこそ。思ふほどよりはあろし。心見えなりともせしられぬ。只心ひとつにのづからおもふ事をたはふれに書つたれば。物にたちまじり。ひとなみくなるべきまゝをもきくべき物かはと思ひしに。はづか

かしきなども見る人ハはの給ふなれば。いとあやしくぞあるや。けにそれれもことわり。人のにくむをもよしといひ。はむるをもあしといふは。心のほどこそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや

みて清少を心に、聴しき人といふ人もあればとぞ。かしきなども見る人ハはの給ふなれば。いとあやしくぞあるや。けにそれれもことわり。人のにくむをもよしといひ。はむるをもあしといふは。心のほどこそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや

たゞ人に見えけんぞねたきや。かやうに我が心中までおしはかられさまんく沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひるまりたるがれたきとぞ。或本に此なほりの詞の跡に「左中将またいせののみさきこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたみさし出し物は。このさうしりて出にけり。まごひさりいれしや。やがておはして。いさ久しく有てぞかへりたりし。それよりありきめたる也とぞあり。又奥書に云。源経房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢朝臣の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。昔加秋云々。此本ニ左中将といへるは。此経房の事也。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる巻にのりて。此草紙の出たるな。さりいれかくさんせしや。終に経房の取ておはして久しくさめてうつし給へるにや。それより此草紙世にひろまりありきたるさ。さし出し物にさいへる物ハは助詞也。此草紙にもあり。源氏物語にもある詞也。さて此奥書に。経房の伊勢守なりしは。長徳の事なるに。其後の長保の比の事など。此草紙にあるは。後に書くはへたるかとの態なるべし。發端にもいひしやうに。后宮かくれさせ給ひてのち。清少おさるへての世に。昔思しき心なのべて書加られし事ありと見えたり。此ゆゑに此草紙に詳畧の異本様々ありとせしるべし。

たゞ人に見えけんぞねたきや。かやうに我が心中までおしはかられさまんく沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひるまりたるがれたきとぞ。或本に此なほりの詞の跡に「左中将またいせののみさきこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたみさし出し物は。このさうしりて出にけり。まごひさりいれしや。やがておはして。いさ久しく有てぞかへりたりし。それよりありきめたる也とぞあり。又奥書に云。源経房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢朝臣の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。昔加秋云々。此本ニ左中将といへるは。此経房の事也。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる巻にのりて。此草紙の出たるな。さりいれかくさんせしや。終に経房の取ておはして久しくさめてうつし給へるにや。それより此草紙世にひろまりありきたるさ。さし出し物にさいへる物ハは助詞也。此草紙にもあり。源氏物語にもある詞也。さて此奥書に。経房の伊勢守なりしは。長徳の事なるに。其後の長保の比の事など。此草紙にあるは。後に書くはへたるかとの態なるべし。發端にもいひしやうに。后宮かくれさせ給ひてのち。清少おさるへての世に。昔思しき心なのべて書加られし事ありと見えたり。此ゆゑに此草紙に詳畧の異本様々ありとせしるべし。

清少納言枕草子者中古之遺風和語之俊烈也并美於紫女源氏物語尤當閱翫之者也然未有選其義按其部考其辭者惜乎蓋有之未見之予自蚤歲好讀無敦志爲訓釋故平日覽古集每有意會則引事題書就思傍訊槩宣意義遂手自出寫以成十二卷以春曙抄爲名猶有疑而闕如之者惟夥更待後之博洽不强鑿說焉今也治隆俗美風雅盛起幸過此時命工彫梓廣流傳于市井也庶幾便和哥之人傲其詞花効其風流云爾

延寶二年甲寅七月十七日

北村季吟書

清少納言枕草紙裝束撮要抄目錄

櫻の直衣すゐの事 附同し下襲狩衣細長等の事

二藍ふたゐの事

香かのうすものの事

卯の花の衣のの事 附柳の衣の事

二三位の袍をまらかしの葉にて染る事

六位藏人青色あざの事 附青白あざ椴あざ麴あざ座山鳩色魚鱗の號又黃あざ檀染の御袍の事

蒲萄染ぶどうの事

あはびむすひのの事

管練火色の事

ひのさうぞくの事 附どのあさうぞくの事

古今冠異なる事

細長汗衫からきぬうへの衣大口はかき指貫の事

はこえの事

草帯の事 附布袴鶴雪の比半靴をはく事

緞帶領巾の事

ひいしらつり事

〔増〕清涼殿の云々  
此段一卷に見えたり

清少納言枕草紙裝束撮要抄

○清涼殿の丑とらのすみといへる段

かうらんのもとに青き瓶の大なるすゑて。根のいみしく  
おもしろきえだの五尺ばかりなるを。いとおほくさした  
れば。かうらんのもとまでこほれ咲たるよ。晝つかた大納  
言殿櫻のなほしすこしなよらかなるに。とき紫の指ぬき  
しろき御ぞども。うへにときあやのいとあざやかなるい  
だしてまゐりたまへり

義按。櫻の直衣ハ。表白裏蒲萄なるものなれば。紫のさ  
しぬき白き御ぞといひつゞけらる。これにて表うらの  
いろおのづからあらはれたり。それ蒲萄はむらさき色  
なる物なればなり

又一説に。表白裏赤花ともみえたり。さくらは直衣にか  
ざるべからず。下襲にも狩衣又は細長にももちふるい

弘云。六巻にさくらの物なほし云々。又十  
巻にもさくらのなほしにけれなほの御ぞみ  
つばかり云々など見えたり

「増」すぎにし方云々此段二巻にあり

ろなり

○すぎにし方こひしきものといへる段

一ある。えびぞめなど

義按。一あるは赤花及青花をもて染とみえたり。それ赤花とは赤藍也。青花ハ青藍ともいふ。此故に二あるといふなるべし。或人曰赤藍は紅藍也。是和訓くれなるとよめるは吳藍（シニヤク）のめられる訓なりといへり。そめやうひせちありと

助入曰。ノアの反ナリ。但くれなぬといふときは反のこによらず約語なり

「増」小しらかは云々此段二巻にあり

○小まらかはといふ所は小一條の大將どのの御家どかしといへる段

香のうすもの。ふたあるのをほし。おなじさしぬきこきすはうの御袴に。はりたるしろきひとへのいとあざやかなるを着給ひて

義按。香のうすものは夏のきぬなるべし。それ香いろは

玉頭承元四年二月十四日癸酉晴入夜仲基入道來時「古事」知足院殿御著三直衣一以三子二陸たる香帷著之

下搔薄紅にして黄をまぜて織よし。三條裝束抄に見え

たり。又或人曰香色は香のたきしみる色によりたる名也。上の段心ときめきする物といへる所に（化粧）けさうして香にしみたる衣きたるといふがとし。只香色とて黄あかく染たるは心ゆかぬ事なりといへり。又こき蘇芳の御袴とは指貫の下袴なるべし

○木の花はといへる段

まつりのかへさに。紫野のわたり近きあやしの家ども。おどろなるかきねなどいとしろう咲たるこそをかしかれ。青いろのうへにしろきひとへかさねかづきたる。あをくちはなどにかよひていとをかし

義按。此段卯のはなの衣にかよへる詞なれば。爰にこれり。卯の花の衣は表白裏青あるが故に青色のうへに白き単かさね。といひつゞけらる。下の段見る物はとい

「増」木の花は云々此段三巻にあり

【増】木は云々  
此段三卷にあり

へる所に。所の衆の青いろしらかさねをけしきはかり  
ひきかけたるは卯のはなの垣根ちかうおほえて郭公も  
陰にかくれぬべうおほゆ。といへるに同じ心なり。又表  
白裏青なるを柳の衣ともいひて。十一月より正二月ま  
で是をもちふ。但柳のきぬの時は柳を織物にし。卯のは  
なの時はうの花を織物にして。その品をわかつと或抄  
にみえたり

○木はといへる段

志らかしなどいふもの。ましてみやま木の中にもいとけ  
どほくて。三位二位のうへのきぬそむるまはりばかりぞ葉  
をだにひとの見るめる

義按。衣服令に一位深紫衣。三位以上淺紫衣と見えたり。  
然るを後世作り紫になせるがゆゑに志らかしの葉をせ  
んじて。それにてそめ其上をふしかねにて染るにや。こ

【増】めでたきもの云々  
此段五卷にあり

れ古制のあらたまりぬるところのかんがへにもならんか  
しとしるせり

○めでたきものといへる段

六位の藏人こそなほめでたけれ。いふしき君達なれども。  
えしもき給はぬあや織物を心にまかせてきたる青いろす  
がたなどいどめでたき

義按。青いろは青白の椽ツツキといへる略名にして。もと麴塵クヂン  
の別名也。それ麴塵の名は禮記の月令の注に書たり。又  
延喜縫殿寮式に青白の椽ツツキと載られたるこれ也。又山鳩  
色魚陵ニギハヤヒなどいへるも此きぬの事也。或人曰魚陵ニギハヤヒとは

天皇の御料といへるところなるべし。志かるをぎよれう  
と名目すべきがために魚陵の字を用ふるにや。只魚陵  
といひて心ゆかぬ儀也。名目につきて文字をかふる事  
例あり。畢竟山鳩色魚陵などいへるは古き俗の名目な

依二名目二管文字之類  
熱線綾。延喜縫部司式裝束諸抄綴線綾（寫  
意）とある是なり。清で可し讀ためなり  
熱紙。延喜式部省式後世宿紙と書入上と同

るべしと。又飭抄に麴塵黄楯染同物のやうに載られたる甚あやまり也。ひと、せ野宮卿と恐ながら是を論じて。後二條關白記。江次第。雲圖抄等已下をもて一物にあらざる事を申あきらめし。是あまねく人のしれる所也。彼卿も我も盛なりしころなれば。つとりてよしなき事を論じ。己不興となりたる事ぞくやしき。夫黄楯染は弘仁以來。天子の正服として。上皇といへども着御の例なし。故に。天皇の服御に位色とある是也。抑麴塵は天皇襲の御袍なるか故に極藤これを申下して常に着用あり。こゝをもて心にまかせてきたる青いろすがたなどいへり。但。主上着御の日には着せずと侍中群要に見えたり。異なるはれには極藤にかざらず第二の藏人已下雜しきまでも給りて着用の例あり。又。上皇皇太子はもとより親王公卿侍臣六位已上。野の行幸の時な

「書」はかせの云々  
此段五卷にあり

弘云。二卷にふたあわえびそめなどのさいでのおしへされて。四卷にえびそめのこきさしぬき。十一卷にえびそめのおりものいなほし云々など見えたり

べて着用古例多しと

○はかせのさえあるはいとめでたしといへる段  
一の人の御ありき春日まうで。えび染の織もの。すべて紫なるはなにもくめでたくこそあれ。はなもいとみかみも。むらさきの花の中にはかきつはたぞすこしにくき。いろはめでたし。

義按。衣服令義解云。蒲萄者紫色之最淺者也とみえたり。又織蒲萄は經赤緯紫なり。故に紫なる品々よりかきつはたまでいひつゞけらる。これら又前段にあけたる青いろのうへにしるきひとへ。かさね。かづきたるなどいへるは。奇妙の文勢どもなり。又下襲にて表裏かけてえびぞめといへるは。表すばう裏花田なるをいへり。或えびぞめのさしぬき。或裏えび染。又えびぞめの織物など一色にていへるとわかちしるべし

「増」小忌のきんだら云々  
此段五巻にあり

○小忌のきんだらば外にゐるものいひなどをすといへる段

小兵衛といふが。あかひものどけたるを。是をむすはゞやといへば。さねかたの中將よりてつくるふにたゞならず。

あし引の山山藍ノ心のつづはこはれるを

いかなるひものどくるなるらん

といひかく。清少納言小兵衛にかはりて

うすこほりあはにむすべる紐なれば

かさす日影日陰愛ノ心にゆるぶはかりを

義按。それあかひもは。小忌の右の手もとにつくるものなり。延喜式踐祚大嘗會曰小齋親王以下皆青摺袍五位以上紅垂紐淺深相副とみえたり。然るを後世蘇芳の濃薄をになむすびにして用ひたり。又清少納言が返しにあはにむすべるとはゆるびても又どけぬといふことゝるにいへり。其

伊勢物語云。むかしのあらでたえたる人のもとに。玉の緒をあはをによりてむすべればたえての後もあはんとぞおもふ

「増」ほそぢの云々  
此段五巻にあり

弘云。七巻に「いれりの下がされなごみたれあひて云々」と見えたり

政事要略。備門府風俗云多。多良女乃花乃加以福利好平夜。誠實也軒平夜。

見ゆ

あは、淡也。桃華葉葉に。衫の横目の扇のとぢたる糸のあまりをあはびむすびにしてといへる事あり。これらにも通ひていとおもしろし。其たよりにもならんかし

○細太刀の平緒つけてきよけなるをこのもてわたるもいとなまめかしといへる段

行事の藏人のかいねりぶさね。ものよりことなきよらに

義按。搔練。後稱念院關白裝束抄曰。搔練下襲。火色下襲。各別物也。共爲赤色之間人存同物之由歟。是不可然

云云。同抄曰。助無智秘抄曰。火のいろの下重はかいねりとかはりたるものなり。火の色とは裏おもてとも打ものにて。中重ナカヘを入たる也。かいねりとは只うらは紅のはりたるにてなかへなき也と見えたり

○まけいしや春宮にまゐり給ふ程の事などいへる段

「増」まけいしや云々  
此段六巻にあり

弘云。九卷に齋院のえんがにて。ひのさうぞくうるはしくて。又十一卷ひのさうぞくくれなぬのひまなびななり

せはきえんに、所せきひの御さうぞくの下がさねなどひ  
ちらされたり

義按。ひのさうぞくとは。束帯の事也。宿衣直衣に對して畫の裝束といへるにや。むかしは御ゆるしなくて。宿衣直衣にては。主上の御まへ、出仕し侍らざる事也。宿衣とは衣冠の事也。直衣はどの宿直のさうぞくとて晴にはあらざる也。ひのさうぞくの事まちく説あれども。すでに下がさねなどひきちらされたりとあれば。たゞしく束帯とはきこえたり

「増」わびしげに云々  
此段六卷にあり

○わびしげに見ゆる物といへる段

雨のいたくふる日。ちひさき馬にのりて前駛したる人の。かうふりもひしげ袍ホコシキも下がさねもひとつになりたるいかにわびしからん

義按。いかに雨ふりたりとも。今の世のかうふりならば

「増」頭辨の御もと云々  
此段七卷にあり

ひしふまじ。いにしへと今のことなるをさしめんとて  
にあげたり

○頭辨の御もとよりとて。主殿司ヌシなどやうなる物  
ぞ。きろきまきしにつゝみてとらへる段

きぬなどにすゝろなる名ともつけけんいとあやし。きぬの名にはそながいさもいひつべし。なぞかきみしりながといへかし。さのわらはのきるやうになぞからきぬはみじかききぬとこそいはれ。されどそれはもろこしの人ののきるものなればうへのきぬのはかま。さいふべし。下がさねもよし。又おほくちながさよりくちひろければ。はかまもいとあぢきなし。さしぬきもなぞ。あしきぬ。もしはさやうの物はあしおころ。なごもいへかし

義按。細長は。かりきぬの。くびかみのやうにたて二三  
はたはりの物也といへり。こゝをよめて細長はさもいひ



十二  
つべしといへるなるべし。さくらの細長なぐしこの細  
ながなどよ或記にみえたり。又かきみ。下の段かきみは  
といへる所に。春はつゝじ櫻。夏は青くちは。朽葉とい  
ひ。上の段作物所の別當する比といへる所の下に。櫻の  
かきみ。萌黄こうはいなどいみしくかきみなぐしり  
ひきてといへり。こゝをもてかき見のしりながといへ  
かしといふなるべし。新葉集。兼昌が哥に。もろ人のあ  
そおなる哉少女子がかきみのすそのながき世ぞかし  
とみえたり。雅すけ装束抄に。着用の次第より裁縫よで  
くはしくしるせり。又からぎぬ。下の段からぎぬはとい  
ふ所に。あかぎぬえび。めもえぎさくらすべてうすい  
ろの類とみえたり。禁秘御抄に。上藤不謂是非。二三位  
興侍號。上藤着赤青色。候御陪膳也と見えたるも是也。  
雅すけ装束抄曰。上藤の女房のいろをゆるといふは。青

十三  
いろ赤いろのかりものゝからぎぬ地すりの裳を着るな  
りといへり。此事紫式部の日記にも委しくみえたり。さ  
れど此書のためにはいさゝか心ありて源氏によりたる  
注釋までも用ひ侍らざる也。和名抄に背子と<sub>して</sub>して  
和名からぎぬと訓じ。形如半臂。無腰襦之袷衣なりと  
見えたり。こゝをもてなぞから衣はみじかききぬとこ  
そいはめといへる成べし。又うへの衣。和名抄に袍。和  
名うへのきぬ。一朝服とみえたり。又下がさねもよしと  
は。名目にたがひなくうへのきぬの下がさねなればな  
り。下の段したがつねはといへる所に。冬はつゝじかいね  
りがさねすはうがさね。なつはふたあるしらがさねと  
みえたり。又大口ながさよりくち廣ければと。いにし  
へは裁縫今にことなるもしらねど。もし小口の袴に對  
して大くちといふにや。其こくちの袴は。主上御鞠あ

そはすとき着御のよし。大槐秘抄に見えたり。又袴いとあぢきなしとは。神代巻に投其禪ノコトこれを開嚙ノコト神といへる下心にてあぢきなしといへるにや。又さしぬきあしぎぬ足ぶくろなどいへかしとは。狂言綺語一興有文章也。和名抄には奴袴とまゐりしてさしぬきと和訓せり。雜令に官戸奴婢三歳以上毎年給衣服條に。冬布襖袴と見えたり。是などによりおこれるにや。西宮記に。古時有制臣下不用。近代五位以上及昇殿六位皆用之とみえたり。其古時有制とはもと奴ヌの袴なるゆゑにや。蓋後世織物綾平絹等をもて裁縫し。若壯より老耆に至るまで深淺色をわかち。

上皇親王よりはじめ奉り。攝清諸家にいたりて地文織やうの品く。装束諸抄にくはしくまゐり給ひ。已に一の制となれり。しかれば今さらいふべき事聊もなし。但

〔増〕うらやましき云々  
此段八卷にあり

私云。十卷かほのおびのかたつきたるをとのあすがたにひきはこえて」と見えたり

〔増〕雪たかう云々  
此段十卷にあり

此書の下段さしぬきはといへる所にむらさきのこきもクイうすき。夏は一藍いとあつき比夏むしの色したるも涼しげ也とみえたり。又まさすけ装束抄に。夏のさしぬき二藍るり色うすいろ織あさぎしをんいろと見えたり。夏むしのいろしたるといへるいろをいふにや

○うらやましきものといへる段

女のつばさうぞくなどにはあらでた、引はこえたる義按、引はこえたるとは、ひきあげたる也。男の束帶するにうしろの三角の所をはこえといへり其かんがへにもならんかしと爰にあげたり

○雪たかう降てといへる段

五位も四位も色うるはしう若やかなるが。上のきぬの色ときよらにて。かほのおびのかたつきたるをとのあすがたにひきはこえて。むらさきのさしぬきも雪にはえて

こさまさりたるをきて。あこめの紅ならずおどろくし  
き山ぶきを出して。からかさをさしたるに。風のいたく吹  
てよこさまに雪を吹かくれば。すこしかたぶきてあゆみ  
くる。ふかぐつはうくわなどのきはまでゆきのいと白く  
かゝりたるこそをかしけれ

義按。かはの帯のかたつきたるとは。有文の帯と聞えた

り。腰帶類和名抄曰。唐衣服令云。革帶玉鈎注云。令按革帶以其

所附金玉石角等爲名。有白玉帶。隱文帶。馬腦帶。波斯

馬腦帶。紀伊石帶。出雲石帶。越石帶。斑犀帶。烏犀帶。散

豆帶等其體有純方丸柄櫛上等之名。革帶是其惣名也。と

見えたり。又とのゐすがたにひきはこえて。むらさきの

さしぬきとは。是布袴といふなるべし。雅すけ装束抄に。

ほうこの事きぬさしぬきうるはしくきて。其うへにし

たがさねきて。うへのきぬにしりつくりて。おびさして。

弘云。六巻に。ふかぐつはうくわなどはき  
て廊のほどなくつすり入るは」ともあり

和名抄曰。金羅帯唐唐薄令云。左右金言  
大將軍各一人紫羅帶金羅起帶

後二條關白記。寛治七年三月廿日丁酉。霜  
降晴卯時。裝束長冠參六條院。予櫻町二下

重箱地平緒螺鈿製物隆文帝云々

さくをもつなりとみえたり。又あこめの紅ならずおど  
ろくしき山吹を出してとは。是紅のふるびて黄いろ  
に見ゆるをいへるにや。下の段ひとへはといへる所に。  
色黄ばみたるひとへなどきたるは心づきなし。といへ  
るに同じ。又寶物集に。紅の戀の涙のいかなればはては  
くちばと成ぞかなしき」と右大辨親宗のよめる心也。其  
あこめとは。赤染の略訓なるべし。正式は紅なるが故な  
り。こゝをもて或もえぎ。或薄色なるは染あこめといへ  
り。あこめの字。延喜式には單の鴉袴ヒトヘ アコメアハセアツとみえたり。其  
外装束諸抄。多は袖アソビの字をもちひ。或は袖の字を用ひら  
る。文字のこゝろによれば。延喜式可ならんか。猶たづ  
ぬべし。又ふかぐつはうくわなどのきはまで雪のいと  
白くかゝりたるとあれば。半靴ハナクツも雪のときはくにや。騎  
馬のときならでは用ひざるやうにおぼえたり。依てこ

〔増〕御經のみに云々  
此段十一卷にあり

弘云。くたいひれの事所々に見えたり。五  
巻なまめかしき物の條。六巻つくも所の別  
當はの條。九巻みる物はの條などに見え  
り

帯。北山抄。女禮以上略。其帯帶染  
合如。縷紐。兩端縫。形。不用。簪用。素。是  
位。義按。衣服令云。此帶。是也乎。領  
巾。延喜禮殿寮式。中宮春季簪云。領巾四  
條料紗三尺六寸。條別九尺

〔増〕まつりの頃は三々  
此段一卷にあり

弘云。けいしとくつとは二物の名なること  
上の一巻に註しおきたり

こにあげたり

○御經のみにあすわたらせおはしまさんとてといへ  
る段

采女八人馬にのせてひき出めり。青すそこの裳。くたい。ひ  
れ。などの風に吹やられたるはいとをかし。ぶぜんといふ  
うねめはくすしちげまさがる人なり。えびぞめのおり  
物のさしぬききれば。しげ正は色ゆるされにけると云々  
義按。裙帯は肩にかけ。領巾は項の飭のよし。或記にみ  
えたり。今の世にはありともき。およばぬなり。又女の  
さしぬき着る事は是馬にのれば也。いにしへは掌侍命  
婦も馬にのれる例あり。又しげ正はいろゆるされにけ  
るとは。延喜彈正式に。凡婦人得着夫衣服色。といへる  
下心にて。采女豊前がえび染の織物のさしぬき着たる  
をたはふれていへるにや

○上の段まつりの比はといへる中に

けいしとくつ。などのをすげさせ。うら<sup>結</sup>をさせなどもてさわ  
ぎ

義按。けいしとくつとは。履子とかけり。和名抄卷の部。山槐  
記等にもみえたり。これは淺ぬりのあしだをいふにや。  
古き賀茂まつりの圖にも見えたり。枝あふぎといへる  
段に。高さけいしをさへはきたれば。といへるもこれに  
てよくきこえたり。異邦のおこりは。晋文公。臣介之推が  
事にはじまれり。此一段は。上の段の文なれば。發端に  
もかくべきを。予がなせる趣向は衣服の事にて筆をと  
とめて。其餘のとは畧しけるに。或人此儀分明ならざる  
よしにてたづねられしを。又こゝにしるせるのみ

清少納言枕草紙裝束抄一卷は壺井先  
生兼て先達注し置く、諸抄に漏れた  
る事のみを拾ひて古記文に考へ二三  
子のために著述せらるゝ所なり然る  
に上坂兼勝予に就て剗劔に命せん事  
を請予も亦同志に示すの幸を好して  
聊校合を加へ新に寫しめ上坂氏の望  
に任する事まかり

享保己酉歲初夏

門人 多田義俊書

縣居真淵翁原著  
加藤千蔭大人序  
村田春海大人跋

重乃色河公

吾縣居のうしをみなに歌書むらすやうのかさねの料にござきぬの色めのを  
 かしきをぬき出てしるされたるを寫して人々のもたるにはいごうつしあや  
 まれるなむすくなからぬこはむら田氏そのもごつ書によりて猶よくたし  
 たる也さて此色めはかのうすやうのみにあらず屏風さうしなごにおすなる  
 しきの染色折ひつのをりたて洲はまの地しきあるはひけこゆひつくるいと  
 の色あひ草木の根つみやうのみやひ事にも此色めにならひてものするわ  
 さなるを其時にのそみてとみにおもひよりかたきこごもあるをさるをりに  
 いとたやすく見いてむためにもたよりよろしけれはとて板にゑりたる也け  
 りそのわきいさゝかはしつかたにしるしつ

千 蔭

かさねのいろあひ

○春

梅がさね おもてこき紅 うめのみぬ おもて白 一重梅 おもて白 紅梅のきぬ おもて紅 つばみうめ おもて紅梅 わかくさのきぬ おもてうす青 やなぎのきぬ	十一月より 二月まで うら 紅梅 上におなじ 上におなじ 上におなじ 上におなじ 上におなじ 上におなじ 正月二月 うらこき青	おもて白 うら青 おもて白 うらもえぎ おもて白 うらうす青 おもてうらとにも こき青 黄柳 おもてうす黄 うら靑 さくらのきぬ おもて白 うらあか花 おもて白 うらこきすはう おもて白 うらむらさき おもて白 うらゑびぞめ おもて白 うらふたあゐ おもてすはう うら赤花	うすはなざくら おもて白 かばざくら おもてすはう おもてすはう うらこきすはう おもてうす色 うらこき二あゐ おもてうす色 うらすはう おもてむらさき うら青 おもてすはう うら花色 櫻もえ木 おもてもえぎ うら赤花 おもてもえぎ うらはなだ おもてもえぎ うらすはう
--	---	---	---

又は おもてもえぎ うらむらさき  
 又は おもてもえぎ うらこき二あひ  
**紅 櫻**  
 おもてくれなる うら紫  
**松さくら**  
 おもてむらさき うら薄紫  
**白さくら**  
 おもて白 うら黄  
**桃のきぬ** 三月  
 おもてくれなる うら紅梅  
 又は おもて白 うらくれなる  
**花山ぶき** やまぶきの  
 おもてうすくら葉 うら黄 のみもいふ  
 又は おもて黄 うらくらば  
 又は おもて黄 うらもえぎ  
**うら山吹**

---

おもて黄 うら紅  
 又は おもて黄くらば うら青  
 又は おもて黄 うらもえぎ  
**青やまぶき**  
 おもて青 うら黄  
**つゝじ**  
 おもてすはう うら青  
 又は おもて白 うらくれなる  
**もちつゝじ**  
 おもてむらさき うら紅  
 又は おもてすはう うら青  
 又は おもてうす色 うらこきすはう  
**いはつゝじ**  
 おもてくれなる うら紫  
**白つゝじ**  
 おもて白 うらむらさき  
**紅つゝじ**

---

おもてすはう うら紅  
 又は おもてすはう うら薄紅  
**さわらび**  
 おもてむらさき うら青  
**すみれのきぬ**  
 おもてむらさき うらうす紫  
**つばすみれ**  
 おもてむらさき うら青  
**ふぢかさね** 三月四月  
 おもてうす紫 うら青  
 又は おもてむらさき うらうす紫  
**白ふぢ** 上におなじ  
 おもてうす紫 うらこき紫  
**ぼうたん** 上におなじ  
 おもて白 うら紅梅  
 又は おもてうすすはう  
 又は おもてうすすはう  
 又は おもてうすすはう うらこき赤色

○夏

**うの花** 四月  
 おもて白 うら青  
 又は おもてうらとにも白  
**わかかへで**  
 おもてうす萌木 うら薄紅梅  
 又は おもてうす青 うら紅  
**かきつばた**  
 おもてふたあひ うらもえぎ  
 又は おもてうすもえぎ  
 うら薄こうばい  
 又は おもてふたあひ うら青  
**あけひのきぬ**  
 おもてうす青 うら薄紫  
**さうび**  
 おもて紅 うらむらさき  
**わかさうぶ** 五月  
 おもて青 うら薄あを

---

又は おもて青 うらこきばい  
 又は おもてうす紅 うら青  
**ねあやめ**  
 おもてしろ うらくれなる  
**花たちばな** 四月五月  
 おもてくらはば うら青  
 又は おもて白 うら青  
**よもぎのきぬ**  
 おもてうすもえ木  
 うらこき萌木  
 又は おもてしろ うらあを  
**苗色**  
 おもてうらとにも  
 うすもえぎ  
**百合**  
 おもて赤 うら朽葉  
 四月五月  
**あふち**  
 おもて紫 うら薄むらさき  
 又は おもてうす色 うら青

---

なでしこ 五月六月  
 おもて紅梅 うら青  
 又は おもてすはう うら青  
 又は おもてくれなる うらうす青  
 又は おもてすはう うらこきすはう  
**花なでしこ**  
 おもてむらさき うらくれなる  
**白なでしこ**  
 おもてしろ うらすはう  
 からなでしこ  
 おもてうらとにもくれなる  
**なつ萩のきぬ**  
 おもて青 うらむらさき  
 ○秋  
**かぢのきぬ**  
 おもてうらとにもえぎ

附録 かさねのいろあひ

萩のきぬ

おもてすはう うらあを  
又は おもて薄むらさき  
うら青

又は おもて青  
うらこきもえぎ

萩かさね

七月より  
九月まで  
おもてむらさき うら薄紫

をみなへし

おもてたて青ぬき黄 うら青  
又は おもて青 うらもえぎ

花すすき

おもて白 うら薄花田

ふぢばかま

八月  
おもてうらともにむらさき

きちかり

おもてうらともに花田  
又は おもてふたあひ  
うら青

あさかほ

おもてうらともにはなだ  
つきくさ

菊がさね

うら薄花田  
九月十月  
おもてしろ うら蘇芳

又は おもて白  
うらむらさき

又は おもて白 うら青

つばみ菊

九月九日より  
まへに用ふ  
おもてくれなぬ うら黄

黄菊

おもて黄 うら青

くれなぬ菊

おもて紅 うら青

うつろひ菊

おもて中紫 うら青  
又は おもてむらさき  
うら白

又は おもて紫 うら黄

りんだう

おもてすはう うら青

又は おもて黄 うら青

又は おもてこき花田  
うら紫

しをん

おもてうす色 うら青

又は おもてむらさき  
うらすはう

又は おもてすはう  
うらもえぎ

もみぢ

おもて黄 うらすはう

又は おもてくれなぬ  
うら青

黄もみぢ 九月十月

おもて黄 うらこき黄

又は おもて黄 うら青

又は おもて黄 うら紅

又は おもてもえぎ うら青

青もみぢ

おもて青 うらくち葉

又は おもて萌木 うら黄

又は おもて青 うら紅

又は おもてこき青 うら青

かへてもみぢ

おもてうす青 うら黄

はしもみぢ 九月

おもてすはう うら黄

又は おもて黄

うらうす萌木

こぐりいろ

おもてひそく うらうす色

くち葉

おもて経紅ぬき黄 うら黄

又は おもてたてうす黄ぬき  
黄 うら白

青くちば

おもてあをにのくろみある  
うら青

又は おもて青 うら黄

黄くちば

おもて黄 うらくちば

枯色

おもて白 うら薄色

又は おもて香 うら青

又は おもて黄 うら青

から野

おもて香 うら青

又は おもて黄  
うらうすあを

氷のきぬ

おもて白みがき うら白

又は おもてとりのこいろ  
うらしろ

初雪

おもて白うら白の少し  
うるみたる

ゆきのした

おもてしろ うら紅

又は おもて白 うら紅梅

つばき これは春  
も用ふ

おもてすはう うら赤

○雑

松がさね

おもて青 うらむらさき

又は おもて紫 うら青

又は おもて青 うら赤

又は おもてもえぎ  
うらむらさき

えびぞめ

おもてすはう うら花田

さゝの青

おもて白 うら青

みるいろ

おもて萌木 うら青



ひはだ色

おもてすはう うら花田

とくさ

おもてもえぎ うら白

鳥のこがさね

おもて白みがき うらすはう

このくさくさは四時いつ

にても用ふへし

にびいろ

これは喪の時さる色也墨のみ  
にてぞむるを本とす其かなし  
みのほどにつけてこきうすき  
あるべし又うつし花にてもそ  
むることありまたうつしはな  
に墨をまじへても

右のいろくは懐紙の染うすやうをかさねたまはむためにあらく書いだし侍るなりその時にしたがひて色をとり合せまたは歌のやうによりて心しらひあるべしたとへば櫻のうたをさくらがさねの紙にかくなどは常の事なりもしさくらの歌にてもちりゆくを雪に見む時は雪によせある色にても又青葉がちならんをおもはゞもえ木なごをもちふべしかゝるたぐひをりにふれてをかしくさりなさんころにまかせたまへ

眞淵

このかさねの色あひは紀のとの、女房のもとめて縣居の翁の書ておくられし也古き家記装束の抄どもには猶さまくの名もこれかれ見ゆれど女房の懐紙さりかさねんためにはたかくてたりぬべければとてもらされたるもおほかりきさてこはふるき抄ごもよりとうてられたるにてみなそのよりどころあれどかゝるもの、事しげからんはうち見るにわづはしければ本書の名をばはぶきてあげられざりしなり

春海

右かきねのいろあひ一卷は、往にし寛政の頃、縣居の眞淵翁が紀州侯の女房達の歌かゝむ薄様の重ねの料にて、ものせられたるものなり。ざるをつぎつぎ書き寫さむには、誤りも出来ぬべしとて、村田春海大人が校合して、みづから板下をかきて、翁の跋文をも出し、又學友加藤千蔭大人が、この書の應用の極めてひろきよしを述べられたるものを序文として、出版せられたるものなれば、世にめづらしき書といふべし。今回参考圖書追加の舉に際し、附録としてここに掲げたり。

大正十一年三月

佐藤仁之助しるす

◎枕草紙春曙抄奥附

明治廿六年七月四日第一版印刷  
同 廿七年十月廿一日訂正二版印刷  
大正十一年三月十日再訂増補卅八版印刷  
大正十三年四月十二日改訂増補卅九版印刷  
大正十四年五月三日改訂増補第四十版印刷

同 廿六年七月十三日第一版發行  
同 廿七年十月三十日訂正二版發行  
同 十一年三月十五日再訂増補卅八版發行  
同 十三年四月十五日改訂増補卅九版發行  
同 十四年五月七日改訂増補第四十版發行

定價金貳圓卅錢

送料金十二錢

原著者 故人 北村季吟

相續者 北村元 部理代人 吉川半七

訂正増補者 故人 鈴木弘恭

改訂増補者 佐藤仁之助

東京市本郷區本郷五丁目八番地

發行兼印刷者 青山清吉

東京市本郷區本郷五丁目八番地

發行所 青山堂書房

振替口座東京二二七七番

賣捌所 全國書籍店



329  
326

終

